



ISSN 2187-6894

# BULLETIN OF FUKUOKA ART MUSEUM

No.11



# 福岡市美術館 研究紀要

第11号

福  
岡  
市  
美  
術  
館  
研  
究  
紀  
要

第  
十  
一  
号

A Study of Family Day Programs: Museum Experiences for Small Children and Their Parents	ONIMOTO Kayoko	1
Report: An Examination of Matt and Whitish Splotches That Appeared on the Varnish during Treatment —the Case of <i>Knight</i> by FUJINO Kazutomo	WATANUKI Yuki	7
Transcription of <i>Unchuan Chakaiki</i> —the Tea Gathering Records by OGI Seisai ⑦	GOTO Hisashi	43

ファミリーDAYについての一考察 ～小さい子どもとその親による美術館利用を考える～	鬼本佳代子	1
【報告文】 修復作業中に起きたワニスの白化現象についての一考察： 藤野一友《騎士》を事例に	渡抜由季	7
『雲中庵茶会記』翻刻稿 ⑦	後藤 恒	43

Edited by Fukuoka Art Museum  
1-6 Ohorikoen, Chuo-ku, Fukuoka, Japan

二  
〇  
二  
三  
年

2023年



表面

参加無料! 福岡市美術館 **ファミリーDAY** 2022 FUKUOKA ART MUSEUM FAMILY DAY

**予約なしで参加できるプログラム**

**かいらぐキッズ 美術館の謎をとけ!**  
11月3日①・5日②・6日③ 10:00~15:00  
場所:1・2階ロビー(受付)、コレクション展示室 対象:5歳くらい〜  
かいらぐキッズになって美術館や作品についてのクイズに答えよう!

**ミニミニワークショップ**  
11月3日①・5日②・6日③ 10:00~15:00  
場所:2階 キッズスペース 森のたね 対象:未就学児とその保護者  
大きなタネの中には何が入っているかな? タネから3つの素材を取り出して「森のなかま」をつくらう!

**はし 走れコブウシくん! +ぬりえ**  
11月3日①・5日②・6日③ 10:00~15:00  
場所:1階ロビー 対象:3歳くらい〜 定員:10人程度(入れ替え制)  
コブウシくんなど美術館の作品が動く人形になるよ、好きな色をぬって、つって遊ぼう! 楽しいぬりえもあるよ。

**はし 布でバッジをつくろう!**  
11月5日① 10:00~②11:00~③13:30~④14:30~  
講師:加藤雅之(かとう たかゆき/福岡教育大学准教授)  
場所:アトスタジオ 対象:小学生〜  
定員:各回20人(15分前から会場前で整理券を配ります)  
※アフリカの布カンガや夏物の模様の色をつけて、自分だけのオリジナルのバッジをつくります。

**事前応募が必要なプログラム**

**はし 箱型カメラをつくって遊ぼう!**  
11月3日④ 13:00~15:00  
講師:長野史(ながの きたし/写真家)  
場所:アトスタジオ 対象:小学生〜  
定員:20人(応募1週につき4人まで)  
カメラのくみって? アーティストと一緒に箱型カメラをつくって、カメラの不思議を体験しよう!

**はし 初めてのベビーカーツアー**  
11月4日① 9:40~10:20 ②10:40~11:20  
場所:2階ロビー(受付)、コレクション展示室など  
対象:1歳半くらいまでのこどもとその保護者  
(ベビーカーか抱っこひもで移動)  
定員:各回5組(各組4人まで)  
小さなお子さんと一緒に美術作品を見ながら美術館をお散歩するツアーです。

**はし 屏風をつくろう!**  
11月6日① 13:00~15:00  
場所:アトスタジオ 対象:小学生〜  
定員:20人(応募1週につき4人まで)  
屏風ってどんなもの? 屏風をつくってそのしみのひみつをときあかそう!

※新型コロナウイルス感染症の影響により、内容が変更となる場合があります。最新の情報は当館ホームページにてご確認ください。

申込方法:応募フォーム、Eメール、または往復はがきでお申し込みください。締切:10月23日(日)必着。いずれも応募者多数の場合は抽選となります。

Eメール:下記A~Dの項目とメールアドレスを記入し、件名を「ファミリーDAY」とし、workshop@fukuoka-art-museum.jpまでお送りください。

往復はがき:下記A~Eの項目を記入し、〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6 福岡市美術館「ファミリーDAY」係までお送りください。

A.参加希望のプログラム B.参加希望の日時 C.参加者全員のお名前・年齢(1週につき4人まで) D.代表者の電話番号 E.代表者の住所

コレクション展観覧料 11月3日(水・祝)は、コレクション展観覧無料です。  
中学生以下無料 高大生150(100)円 一般200(150)円 ※( )内は20名以上の団体料金  
※下記の団体無料に当てはまります。展示室入り口にて証明書を提示ください。  
●特別支援学校・障害者手帳・特別障害者福祉手当を所持している方  
●特定医療費(特定難病)受給者証 特定疾患医療受給者証・先天性血液凝固因子障害等医療受給者証・小児慢性特定疾患医療受給者証 ●障害者手帳(アフリミイD) ●福岡市、北九州市、熊本市、鹿児島市在住の65歳以上の方は住所と生年月日がわかるもの(健康保険証、運転免許証等) ●wa-club(わがクラブ)会員証

交通案内  
地下鉄:空港線「大濠公園」福岡市美術館口駅3・6番出口から徒歩10分、七隈線(六本松)駅2番出口から徒歩10分。  
西鉄バス:福岡市美術館東口下車、徒歩3分。「赤坂三丁目」下車、徒歩5分。  
車:福岡空港から30分、博多駅から20分、天神から10分、有料駐車場(26台)有

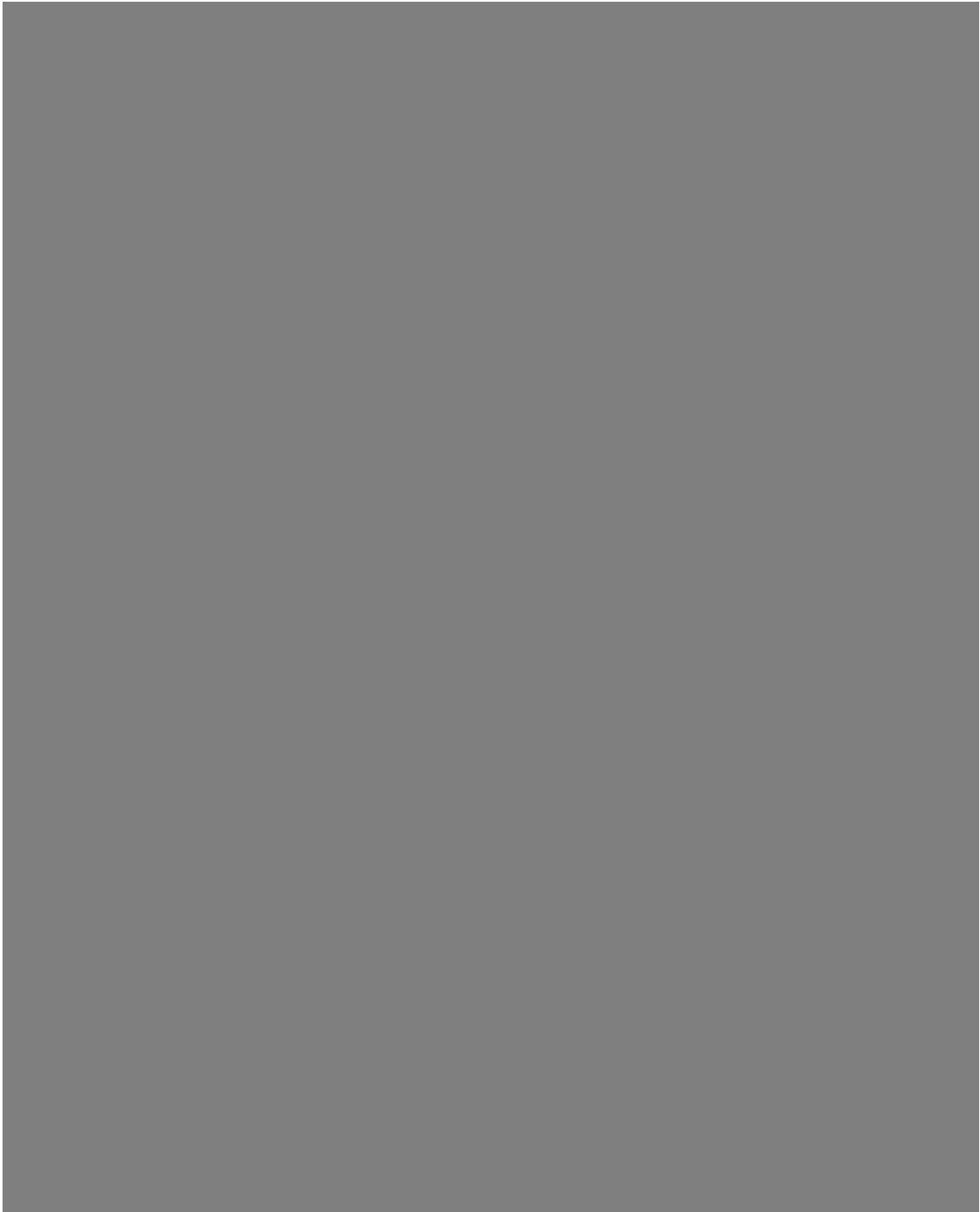
お問い合わせ  
福岡市美術館 Tel.092-714-6051 Fax.092-714-6071 ホームページ <https://www.fukuoka-art-museum.jp/> 〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6

裏面

口絵 1

「ファミリー DAY2022

みて、きいて、はなして、つくって 家族で楽しむアートミュージアム」チラシ



口絵2  
藤野一友《騎士》1965年頃（修復後・額装）

# ファミリー DAY についての一考察

## ～小さい子どもとその親による美術館利用を考える～

鬼本佳代子

### はじめに

福岡市美術館では、1990年の「夏休みこども美術館」の開始以降、子どものための教育活動を年間を通じて定期的に行っている。全国的に見ても、子どものための展覧会やあるいはワークショップ、学校団体の受け入れなど子どものための活動は、美術館で定着しているといっていいただろう。しかし、一方で、子ども、特に未就学児を連れての作品鑑賞は、利用者の一部にとっては受け入れがたいものである<sup>(1)</sup>。本論で扱う「ファミリー DAY」は子どもとその保護者に、当館の開館記念日を周知するという目的とともに、家族で美術館を楽しむという体験をしてほしいという考えで開催している（口絵1）。本論では、まず最初に、さまざまに種類のある博物館の中でも「美術館」である当館とそのほかの館種との入館者データから、子どもとその保護者にとって美術館がどのような場所であるかを考える。次に、歴史的・社会的状況から美術館と利用者としての子どもとの関係性を考察する。それらを踏まえ、ファミリー DAY でとられたアンケートの分析から、ファミリー DAY が利用者と美術館にとってどのような意味があるかを考察する。

### 来館者としての子ども

本章では、当館と館種の違う博物館で入館者の様相がどのように違うのか、あるいは同じなのかを見ていきたい。当館との比較として、できるだけ人口や環境の違いが生じないように、まずは福岡市内にあり福岡市運営である歴史系博物館・福岡市博物館、そして隣接する都市にあり、同じく市立の自然史・歴史系博物館・北九州市立自然史・歴史博物館のいのちのたび博物館をとりあげる。また、2020年度以降は新型コロナウイルス感染症の影響により、休館や人数制限を余儀なくされたということもあり、比較するには適当ではないと判断し、2019年度の入館者データを比較することとした。なお、福岡市博物館、いのちのたび博物館については、既に公開されている年報のデータを参照した。ただし、福岡市博物館については入館者の年齢区分がある常設展示の入館者数を用い、それに合わせ福岡市美術館については、館内データとして集積されているコレクション展示室の入館者数を参照した<sup>(2)</sup>。それが表1である。それぞれの入館者、すなわち一般（大人）、高大生、小中生（中学生以下）の割合を比較してみたい。まず、3館とも高大生の割合が最も少ないという共通項を持っていることに気づく。また、いずれの館も一般（大人）の割合が最も多いが、福岡市博物館については、他の2館に比べて大人の来館者が最も大きな割合になっており、逆に福岡市美術館は、中学生以下の割合が10%と3館の中で最も低くなっている。ただし、福岡市美術館については、「障がい者・介護者」と「その他」の年齢層がわからないため、純粹に年齢層だけで分けた場合、一般（大人）、高大生、小中生（中学生以下）の割合は多少前後する可能性はあろう。しかし、「その他」の内訳はボランティアや学校の引率教員などであり、主に大人と考えられ、かつ、今の割合で、中学生以下は福岡市博物館より10ポイント、いのちのたび博物館と比べると17ポイントも低くなっており、順位が変わるほどの変化はないだろうと予想される。もう一つ、特徴的なのが、いのちのたび博物館が「未就学児」を入館者として計上しているという事である。小中学生と未就学児を合わせると、いのちのたび博物館の入館者の半分以上がいわゆる「子ども」である



ことがわかる。なお、福岡市美術館は、未就学児については個別の項目は設けず、中学生以下に計上している。また、いのちのたび博物館は小中学生の入館料料金をとっているが、福岡市美術館、福岡市博物館は中学生以下無料となっている<sup>(3)</sup>。

### 2019年度の3つの館の入館者比較

#### 福岡市美術館

	一般	高大	中学生以下	65歳以上	障がい者 介護者	その他	計
数	67,263	6,401	11,749	7,065	5,481	18,752	116,711
%	58	5	10	6	5	16	100

※%については小数点以下は四捨五入。なお、本年度の4月～5月26日は全館展示室を使用したリニューアルオープン展期間中であったため、その入館者数は計上されていない。

#### 福岡市博物館

	一般	高大生	小中生	計
数	89,447	9,810	25,014	123,271
%	72	8	20	100

※%については小数点以下は四捨五入

#### 北九州市立自然史・歴史博物館 いのちのたび博物館

	大人	高大生	小中生	未就学児	計
数	205,887	12,818	122,164	111,994	452,863
%	45.5	2.8	27	24.7	100

このことから、相対的に考えて、やはり自然史・歴史系の博物館に比べて、美術館は子どもが行くという場所とは認識されていないということが推測できる。もちろん、各館の構造上、入館者をどのように数えるかの違いや、またチケット区分から割り出される入館者の分類の違いなどがあるため、そのまま数値を比較するのはやや乱暴にすぎるかもしれない。しかし、福岡市美術館に比べ、いのちのたび博物館は有料であるにもかかわらず小中学生の割合が多くなっていることや、未就学児も一つの群になるほどの多さで来館しているということを考えても、また、ほぼ同じ条件にも関わらず、福岡市博物館の方が小中学生の割合が大きいことを考えても、自然史・歴史系の博物館の方が「子どもが行きやすい」と認識されていると仮定することはできるだろう。

### 子どもと美術館の教育普及活動

美術館と子どもについて、2022年2月12日の朝日新聞に「美術館に赤ちゃん連れNG?」という投稿記事が掲載された。その投稿に対し、3月2日、3月28日と意見を募る形での記事掲載があった<sup>(4)</sup>。この記事内容は、前章の「美術館は他の博物館に比べて相対的に子ども連れで行きにくいイメージがある」という仮説の傍証の一つに数えられるだろう。しかし、「美術館に赤ちゃん連れNG?」と感じるのは、なぜだろうか。記事にもあるように、

一つに、美術館の中では静かにしなければならないという「暗黙の了解」があるからではないだろうか。しかし、この「静かにする」というのは、例えば「作品に触らない」などのように作品保存のためなどの合理的な理由があるわけではなく<sup>(5)</sup>、あくまでも「他の来館者に迷惑をかけない」という配慮によるものである。つまりは、来館者同士がどのように感じるかが課題となってくるわけである。しかも、この「配慮」を、すべての美術館ではないものの、当館を含め美術館自体が「美術館のルール」として来館者に向けて発信し、その習慣を補強しているということは事実である（図1）。

ご来館にあたり、次のことをお願いしています。

1. 美術館での活動（授業）のねらい・めあてをあらかじめ児童・生徒の皆さまと確認してください。
2. 美術館ではできることもたくさんありますが、作品保全のため、他のお客様の鑑賞を妨げないため、できないこともあります。美術館で気持ちよく過ごしていただくため、下記の点を、理由も含めて児童・生徒の皆さまに必ずお伝えください。
 

※ 作品の保全のため・・・ <input type="checkbox"/> 作品にはさわらない <input type="checkbox"/> ロビー、展示室では飲食をしない <input type="checkbox"/> 走らない	※ 他のお客様の鑑賞を妨げないため・・・ <input type="checkbox"/> 大きな声を出さない
--	--
3. 児童・生徒の皆さまと展示室と一緒にご入場ください。2. が守られているか見守るとともに、子どもたちの気づきやひらめき、変化などを見逃さないでください。
4. 写真撮影をご希望の場合は、必ず事前にご相談ください。撮影が可と不可の場所があります。無断の撮影はご遠慮ください。
5. 展示室でのメモ等には鉛筆をお使いください。（ボールペン、シャープペンシル、消しゴム不可）  
※学校で作成したワークシート等を使用される場合は事前にお知らせください。

**観覧料および減免申請について**

コレクション展示観覧料  
一般 200円（150円）、高大生 150円（100円）、中学生以下無料

※（ ）内は20人以上の団体料金

**減免申請について**

「観覧料減免申請書」をご提出いただくことで、全国の小・中学校およびそれに該当する学校団体により、引率の先生方はコレクション展示観覧料が無料になります。  
※教員以外の引率の方（旅行代理店、保護者など）は、減免の対象となりません。

〔減免申請書の入手方法〕  
当館ホームページ <https://www.fukuoka-art-museum.jp/>  
トップページ > 教育普及 > 学校向けプログラム > スクール・ツアーでダウンロードしてください。  
※申請書の「代表者名」には校長先生のお名前を記入し、「印」は校印を押してください。

〔減免申請書の提出方法〕  
減免申請書に必要事項をご記入のうえ、郵送、お手持ち、庁内メール（福岡市教育委員会所管学校のみ）のいずれかの方法で「福岡市美術館 教育普及係」宛てに、ご来館1週間前までにご提出ください。

そのほか、何かございましたら下見の際にご相談ください。

図1  
福岡市美術館スクールツアーパンフレット  
(2018年作成) より

「ご来館にあたり、次のことをお願いしています」の中に、「他のお客様の鑑賞を妨げないため・・・大きな声を出さない」とある。

それにしても、美術館で静かにしなければならないという「暗黙の了解」はいつどのように醸成されたのであろうか。はっきりと述べることはできないが、1930年発行の『博物館研究』の3月号には、博物館事業促進会（現・日本博物館協会）理事である矢代幸雄の講演会記録として下記のような文章が掲載されている。

「美術館は静かであつて欲しい、演説に依つて美術品が解説されない方がよい・・・」<sup>(6)</sup>

また、同年6月号にはその続きが掲載されているが、そこには「五、美術館組織及び経営上の原則」とあり「(二) 社会教育的ノ為メニ為サル可キ設備」に「コレハ上述ノ研究者本位ナル根本方針ヲ棄サザル範圍ニ於テ、静カニ且ツ印象深ク行フコトヲ得ベシ。」とある<sup>(7)</sup>。この一事例だけで断じることはできないが、少なくとも戦前には「美術館は静かであるべきだ」という考えが博物館業界の中でも流布していたことがうかがえる。

しかし、一方で、常に日本の美術館が子どもの利用者を排除してきたかといえばそうではない。例えば、同じ『博物館研究』の1928年のVol. I No.1には、イギリスの事例として学校生徒への美術館の役割の重要性を説く記事が掲載されている<sup>8)</sup>。また、時代は下るが、1970年代以降、地方美術館が建設されるようになるに従い、子どもあるいは家族向けの展覧会や教育活動が増えてくる。1980年代には横浜美術館のように子ども専用の空間を設けるところや、教育専門の学芸員や職員を雇用し、積極的に子ども向けのプログラムを実施する館も出てくる<sup>9)</sup>。2010年代には乳幼児とその保護者のための教育プログラムとして「ベビーカーツアー」などを実施する美術館も出てくる。むしろ、1990年代以降、美術館は、積極的に「子ども」を利用者としてみなしてきたと考えることができる。

結論を言うと、このような積極的な子どものための活動と、「静かにするべき」という間接的に子どもを排除する「美術館のお約束」という相反する思想が美術館側にも利用者側にもあり、それが「しゃべらない」という新型コロナウイルス感染拡大防止策とあいまって、矛盾が顕在化したのが現在なのではないだろうか。

### ファミリー DAY を実施してわかったこと

2013年、福岡市美術館の教育普及活動として、若いファミリー世代に向け、開館記念日の周知と、家族で体験する美術・美術館の楽しさ、面白さを知ってもらうために、ファミリー DAY は始まった。以降、毎年開催されている。本企画は、11月3日の福岡市美術館開館記念日を中心に、前後2日間の週末を合わせ、3日間を期間とし、いずれの日も10:00～15:00の間に、館内の複数個所で同時にさまざまなプログラムを実施するというものである。プログラムは、基本的には当日に受付、定員のあるものは先着順、そうでない場合は時間中いつでも参加できるようにしている。ただし、2016年から当館はリニューアルのための休館に入ったので、同年は夏休み期間中に1日のみ開催し、2017年は市内の児童館にて事前応募制で、また2018年はオープン前の当館展示室にてやはり事前応募制で開催した。さらに、2020年から2022年にかけては、コロナ禍ということもあり、アートスタジオ等比較的閉じた空間でのワークショップは、一部を除き事前応募制をとった。

各プログラムについては、年ごとに内容を変えてはいるが、ボランティアによるギャラリートーク、作品を見ながらクイズを解いたり自分の考えを書くワークシート、当館コレクションのぬりえ、そして未就学児のための制作ワークショップ、さらにはアーティストなどによるワークショップなどで、さまざまな年齢の子どもたちとその親が、年齢に応じてプログラムを選べるようにしている。また、当館のボランティアおよび近隣大学生がボランティアスタッフとして各プログラムをサポートするため、彼らの交流の場ともなっている。



図2 ファミリー DAY2022より  
作品や建物についてのクイズを解く  
「かいとうキッズ美術館の謎をとけ！」



図3 ファミリー DAY2022より  
コレクション作品のぬりえ



図4 ファミリー DAY2022より  
未就学児対象の制作ワークショップ  
「ミニミニワークショップ」

さて、ここで次ページの表2、表3を見てもらいたい。表2は、これまでのファミリー DAY の参加者数の推移である。表3は2022年に開催されたファミリー DAY で実施したアンケートによる、参加者の年齢の内訳である。

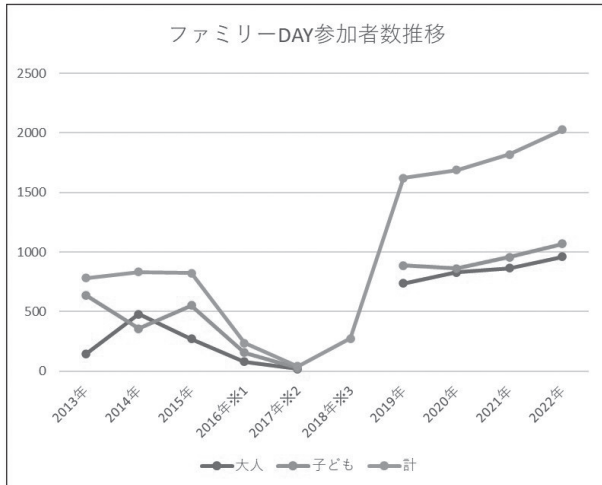


表 2

※ 1 8月7日のみ開催

※ 2 福岡市立中央児童会館にて11月4日のみ開催。事前応募制。

※ 3 11月3日のみ100組の家族限定で事前応募制で開催。

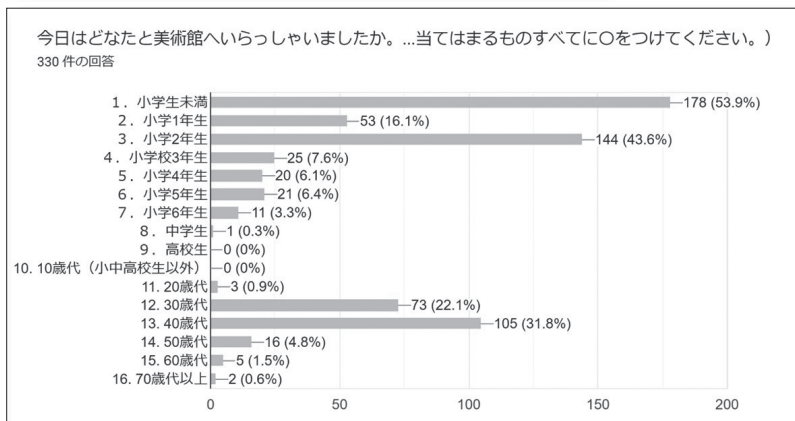


表 3

2022年ファミリーDAYのアンケートより。参加者の年齢内訳

※集計は鬼本佳代子、崎田明香、中原千代子、八並美咲で行った。

表2を見ればわかる通り、ファミリーDAYの参加者は、同企画を開始した2013年は子どもの数が638人だったが、リニューアルオープン後の2019年は886人、そして2022年には1067人とかなり増えている。なお、大人は開始当初はプログラムによって数えたり数えなかったりと正確な数字とは言えない。リニューアル後は基本的に保護者の数も数えているため、一見、大人の数が増えているように見えるのはそのせいであることを付け加えておく。また、表3の年齢層の内訳をみると突出して未就学児が多いことがわかる。実は、2013年を除き、ファミリーDAYのチラシは福岡市内の小学校2年生全員に配布するようにしているのだが、確かに、小学校の他の学年よりも小学校2年生が多くはなっているものの、それに比しても未就学児のほうが多いことはわかるだろう。実は、2014年、2021年にも同様のアンケートを取っているが、未就学児が突出して多いことは変わらない。一方で、自由記入欄を見ると「未就学児が美術館に行くきっかけとなりよかったです」と思いましたや「子どもがまだ小さいので、美術館に行く機会がありませんでしたが、一緒に参加して楽しむことができよかったです。」と普段は子連れで美術館に来にくいと感じている感想も見受けられる。また、「アートにふれながら子供と楽しく参加できて良かったです。」「こどもも楽しんでいました」と、親子で楽しめたことがわかる感想が散見される。アメリカでの来館者調査によると、家族は「家族のイベント」として美術館・博物館に行くということだが<sup>(10)</sup>、本アンケートの自由記述からもそのことが垣間見られる。

## 終わりに

ファミリーDAYの参加者数推移とアンケートからも、美術館に来たいと思っている、未就学児を持つ保護者は、



潜在的にもかなりいるということが推測できる。本企画については、徐々にではあるが、リピーターも増えており、アンケートからも今後も子どもと美術館に来ることを考えている人が多いこともわかる。さらに、前述したように、本企画には近隣大学生、特に福岡教育大学の学生が多くボランティアスタッフとして参加している。将来教員となる可能性の高い学生たちが、この企画にボランティアとして参加することで「美術館は子どものための施設ではない」という偏見や「静かにしなければならない」という考えを改めていることには、変化の希望も感じられる。福岡市美術館において、さまざまな利用者がまじりあうファミリー DAY は、新しい美術館像を発信する場の一つとして、機能していると言えるのではないだろうか。とはいえ、美術館に対する考えを内外ともに変化させるにはなお時間が必要だろう。しかし、美術館・博物館はあらゆる人々のための教育・文化施設であるというのであれば、未来ある子ども達の体験を奪うべきではない。一方で、同じ理由で「静かでほしい」と願う人たちのことも排除すべきではないだろう。美術館としては、常に利用者対話し続けると同時に、これまでの「暗黙の了解」を上書きするのではなく、人々の心理的障壁を取り払う場がもっと必要なのではないだろうか。福岡市美術館においても、ファミリー DAY という特別な場だけでなく、日常的にもそのような場をつくっていきたいと考える。

(おにもとかよこ 福岡市美術館主任学芸主事)

<註>

- (1) 「美術館に赤ちゃん連れ NG?」朝日新聞 (2022 年 2 月 12 日朝刊)
- (2) 『福岡市博物館年報 28』(福岡市博物館、2019 年) p.54、『北九州市立自然史・歴史博物館(北九州市立いのちのたび博物館)年報 令和元年度』(北九州市立自然史・歴史博物館、2020 年) p.10  
福岡市科学館も比較の候補としていたが、2019 年の入館者の内訳が無かったので割愛した。ただし、来館者アンケートでは年齢区分があり、未就学児童が突出して多いことがわかる。(『福岡市科学館年報—2019 年度(平成 31 年度・令和元年度)版—』(福岡市科学館、2020 年) p.11)
- (3) 北九州市立自然史・歴史博物館 いのちのたび博物館「ご利用案内」 <https://www.kmnh.jp/access/> (2022 年 12 月 21 日取得)、福岡市博物館「ご利用案内」 <http://museum.city.fukuoka.jp/about/information.html> (2022 年 12 月 21 日取得)、福岡市美術館「利用案内」 <https://www.fukuoka-art-museum.jp/guide/> (2022 年 12 月 21 日取得)
- (4) 「美術館に赤ちゃん連れ NG?」前掲註 1、「どう思いますか 美術館に赤ちゃん連れ」朝日新聞(2022 年 3 月 2 日、朝刊、「赤ちゃん連れ OK」観覧日を)「美術館行く習慣 子ども時から」朝日新聞(2022 年 3 月 18 日、朝刊)
- (5) 参考までであるが、博物館法第一章第二条(定義)において、「この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む。以下同じ。)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関・・・」とあり、資料の保存・保管については明確に博物館(美術館)の活動であると記されている。
- (6) 矢代幸雄「美術館問題」『博物館研究 vol. III No.3』(日本博物館協会、1930 年 3 月 1 日) p.2
- (7) 矢代幸雄「美術館問題」『博物館研究 vol. III No.6』(日本博物館協会、1930 年 6 月 1 日) p.3
- (8) 「博物館及美術館に於ける美術教育」『博物館研究 vol. I No.1』(日本博物館協会、1928 年 6 月 1 日) p.8
- (9) 鬼本佳代子「福岡市美術館「夏休み子ども美術館」の歴史の変遷とその効果について」『福岡市美術館研究紀要 第 1 号』(福岡市美術館、2013 年) pp34-45
- (10) ジョージ・E・ハイン『博物館で学ぶ』(同成社、2010 年)

# 【報告文】修復作業中に起きたワニスの白化現象について の一考察：藤野一友《騎士》を事例に

渡抜由季

## 1. はじめに

本稿は福岡市美術館所蔵の藤野一友《騎士》(口絵2)の修復処置中に認められたワニスの白化現象について発生の要因を明らかにし、修復処置方法について改めて考察するものである。本作は福岡市美術館主催の「藤野一友と岡上淑子」展(会期 2022年11月1日(火)～2023年1月9日(月・祝)、会場 福岡市美術館特別展示室)の出品に先立ち、保存修復処置の対象としていた。修復作業中、処置の一環で絵具層の浮き上がりを接着するために電気ゴテを用いてシリコンシート越しに加温、加圧作業を行ったところ、作品表面の一部に白色化が認められた(図1, 2)。幸いにも溶剤を用いたその後の修復処置でこの症状はすぐに治まったが、普段行う修復作業でもこのような現象が発生することを過去にも経験したことがあった。発生時の作業内容から、作業中に利用した熱や圧力がこの現象に関連していることは容易に考えられる。しかし、その発生の直接的な理由は明らかではなかった。そこで、そもそも何故このようなことが起きたのかその仕組みを探り、先行研究と比較しつつ課題と対応策について考察することとした。これは作業中に認められた些細なインシデントともいえる。しかし、こうした小さな事例でも公表していくことで、今後他の事例で同じ要因の被害を引き起こさないよう予防する上でも、資料として重要な意味を持つと考えている。

## 2. 作者と作品の基本情報

作者である藤野一友(生年1928年-没年1980年)は戦後の日本国内において幻想的な表現を探求し続けた作家である。詳細は展覧会図録『岡上淑子・藤野一友の世界』<sup>(1)</sup>で詳しく述べられているので参照されたいが、油彩画や素描を数多く残しており、当館が所蔵する主な作品は300点を超える。うち、本作はこの所蔵作品の一つで、1965年頃に制作されたキャンバスの油彩画で、サイズは41.0×31.7cmである。同年に本作を基に制作したと考えられる《肉を着た鎧》(1965年作、油彩・画布、162.0×97.7cm)も所蔵している。次に本作の修復前の状態について説明する。画面右下には「K.Fujino」と署名があり(口絵2、図3)、裏面木枠右下にはサイズを表す「F 6」の焼き印が認められた(図4)。支持体となるキャンバスの緩みに伴い画面の絵具層に木枠当たりが発生していたが、それ以外でも絵具層の亀裂が多く、特に背景の空部分の絵具層は浮き上がり剥落が複数個所認められた(図5)。ただし、全体的に絵具の固着状態は良好である。表面にはワニスが塗られており、めくれたような浮き上がりや剥落が発生していた。これはキャンバスの緩みに加えて絵画で使われた支持体や絵具、ワニスそれぞれの伸縮性の違いで起きたと考えられる。また、画面右上および左下の空部分には茶褐色の粘着質な汚れが付着していた。作品は額縁の入子寸法よりも小さく額から外れやすい状態であったため、一時的な補強を目的として紙製のスペーサーと釘で固定されていた。木枠には楔は取り付けられていなかった。過去の修復歴はない。

### 3. 処置方針と工程

ワニスの白化現象のテーマに触れる前にこの現象に至るまでの本作の修復について方針も含め先に述べたい。主な損傷はキャンバスの緩みによる木枠当たり・亀裂・浮き上がりである。これは温湿度の変化によって起こりうるもので、美術館収蔵庫等の一定の温湿度環境下にて保管すればある程度予防することが可能といえる。とはいえ、既に起こっている木枠当たりや亀裂・浮き上がりは美観の問題や取り扱いのリスク増加も懸念されるため修復する必要があった。そのため根本的な問題であるキャンバスのたわみや変形を修正することを一番の目標と設定し、修復処置を行った。目標となるたわみや変形修正は、はじめにキャンバスを木枠から取り外し再度張り込み直すことで改善した。なお、キャンバスに張りしりを追加し、木枠に折り込み固定することで額縁と作品の隙間を塞いだ。次に作品の表面に付着した汚れを洗浄し取り除くこととした。汚れはペトロールで溶解することが分かったが、この溶剤でワニスも溶解することが処置前調査の一つである耐溶剤テストで分かった。ワニスは絵画の画面保護を目的として塗布されるものであり、かつ経年変化を外観上で認知することが出来るものでもあるため、除去すべきか否か検討する必要があった。そこでワニスを残すかどうか展覧会担当者に確認を取り、制作当初の色合いを保持するためにも出来る限り残す方針とした。亀裂や浮き上がり、剥落箇所は膠水や必要に応じて電気ゴテを用いて絵具層を接着することで補強した。剥落箇所は鑑賞者の視線が損傷部に集中しないよう目立たない程度に補彩した。額と作品の固定に使われていた釘は錆が目立ち始め、耐久性に不安があるため取り外し、T字金具を取り付けることで固定した。(図6)

### 4. 作品の白化現象について

本作品に白化現象が認められたタイミングは浮き上がり接着作業のために電気ゴテを用いて加温・加圧していたときであることから、温度や圧力に起因する損傷であることは容易に想像できる。ただし、症状そのものは火傷にみられる火ぶくれとは異なっていた。発生した現象を顕微鏡で確認したところ、絵具層の上に塗布されたワニスに微細な穴や気泡が数多く見られた(図2)。ただしこの現象はワニスに限定したもので、絵具層への影響は認められなかった。

ワニスの白色化に関連する損傷は一般的にはブルーミング(Blooming)とブランチング(Blanching)が該当する。ブルーミングは油絵具から抽出された成分(遊離脂肪酸、金属石鹼、ワックスまたはその分解物)が表面に移行し、堆積していく現象である<sup>(2)</sup>。一方のブランチングは、絵具やワニスの層の中に発生する微細な欠陥(空洞、顆粒など)により、その部分が明るくなったり、白っぽく見える現象である<sup>(3)</sup>。近年の研究によると変質したワニスや絵具の層に数nmから数 $\mu$ mの球状の孔が存在し、光の散乱で白く見えるということが明らかとなった<sup>(4)</sup>。いずれもワニスに関わるものだが、ブルーミングは表面上に限定して起こるものであるのに対し、ブランチングは内部まで損傷しているケースがあるという点で明確な差異がある。この違いで比較すると本作に起こった現象はブランチングに似ているといえる。

では何故このような現象が起きたのか。まずは温度から検証してみたい。今回、修復用に用いたコテは70℃に調温し使用していた<sup>(5)</sup>。ワニスとして作品に塗布されていたと思われるダンマル樹脂<sup>(6)</sup>は、軟化点が70～80℃、融点が100～160℃としている<sup>(7)</sup>。一方、浮き上がり接着に適切とされる温度は30～80℃で<sup>(8)</sup>、60℃や70℃を推奨する報告もある。しかし、いずれも膠水の溶解する温度を論拠とする場合<sup>(9)</sup>や、絵具層を柔らかくするため<sup>(10)</sup>といった接着剤と絵具に限定するものであり、ワニスについての報告は事例は筆者が調べる限りではなかった。そこでワニスの溶解について簡易な実験を行うこととした。

まず試料として、ダンマル樹脂(スマトラ産)を $\alpha$ -ピネン溶液で30wt%に混合した溶液を準備した。次に

ガラス板に混合溶液を縦 40mm × 横 40mm 厚さ約 0.1mm に塗布し、22℃、55%の常温常湿下にて 5 日間乾燥させた。乾燥後、70℃に温めた電気ゴテを各試料に緩衝材を通して 5 秒間均一にあてた。コテをあてた回数はそれぞれ 0、1、2、3、4、5、6 回の 7 種類で、緩衝材としてシリコンシート、PET フィルムを使用したもの、緩衝材を使わず直接コテをあてたものも含め計 3 種の方法で試みた。外観の変化を実体顕微鏡下にて観察したところ、緩衝材の種類による明らかな外観変化があった。実体顕微鏡による観察では、シリコンシートを緩衝材として用いた場合の試料は表面にシートの微細な凹凸が写し取られており、肉眼で見た場合白っぽく色に変化したように見えた (図 7)。PET フィルムを緩衝材とした場合は、試料に設置した際に偶然できたフィルムの気泡がそのままワニスに写し取られ、さらに言うところの際 (きわ) 部分があたった箇所に微細な気泡も認められた (図 8)。なお、緩衝材が無い場合は単純に軟化しクリームのようにコテに接着した。この実験から、電気ゴテの温度を 70℃に設定した場合でも微細な気泡が発生する可能性があること、ワニスの軟化によって緩衝材表面の凹凸が写し取られる可能性があることが分かった。

## 5. まとめ

本作が部分的に白化した箇所は絵具層の浮き上がりの際 (きわ) 部分であり、他の箇所よりもコテによる負荷がよりかかったといえる。また、実験でも明らかとなったように、浮き上がり接着作業で推奨される温度であってもワニスは軟化し、形状の変化や微細な気泡が発生する可能性があることが分かった。つまり、ワニスが白化したとしても温度を厳守していれば、後の作業工程で問題なく復旧することが可能と考えることが出来るかもしれない。ただし、今回実験に用いた樹脂は新しいものであり、美術館の所蔵作品に用いられているケースとは時間の蓄積が異なるため、一概に言う事は出来ない。引き続き慎重に対応していく必要があるといえる。

また、そもそも熱や圧力をかけずに接着する手法を探ることも重要だろう。例えば、裏側から絵具の剥離箇所を吸引、接着するという方法もある<sup>(11)</sup>。もし表面から加温したとしても、裏面からの吸引に伴う気化熱によって接着剤の温度が即座に冷却されることも考えられる。また、ワニスの残し方に対する考え方を再考するののも一つの手だと考えられる。当初は色合いを残すためにワニスを残すという方針であった。それならば始めにワニスを全て取り除き、最後の作業で古色のついたワニスを新規で塗布する、という考えも選択することが出来る。全てをマニュアル化または統一するという事は決して出来るわけではないが、可能性を絞りすぎずに適切な選択をしていくよう引き続き注意していきたい。

最後に紀要執筆に際し掲載を許可して下さったご遺族の方に深く感謝申し上げます。

(わたぬきゆき 福岡市美術館学芸員)

### <註>

- (1) 岡上淑子・藤野一友 (著) 福岡市美術館 (編) 『岡上淑子・藤野一友の世界』河出書房新社
- (2) Michael von der Goltz, Ina Birkenbeul, Isabel Horovitz, Morwenna Blewett, Irina Dolgikh, Consolidation of flaking paint and ground, *Conservation of Easel Paintings*, Routledge, 2012, p.234
- (3) [https://www.getty.edu/vow/AATFullDisplay?find=bloom&logic=AND&note=&english=N&prev\\_page=1&subjectid=300186215](https://www.getty.edu/vow/AATFullDisplay?find=bloom&logic=AND&note=&english=N&prev_page=1&subjectid=300186215) (最終アクセス日 2022 年 11 月 22 日)
- (4) Anaïs Genty-Vincent・Théo Phan Van Song・Christine Andraud・Michel Menu, Four-flux model of the light scattering in porous varnish and paint layers: towards understanding the visual appearance of altered blanched easel oil paintings, *Applied Physics A* volume 123, 2017
- (5) 温度評価はサーモワッペンと呼ばれる温度によって色変化するラベルで確認した。
- (6) ワニスの分析はせずミネラルスピリットで溶解したこと、当時の画材流通の状況から推察した。



- (7) ホルベイン工業技術部（編）『絵具材料ハンドブック』中央公論美術出版、p.99  
また、融点が分子構造の種類によって 136～193℃と推移するという報告もある（C. Velson Horie, *Materials for Conservation*, 2nd. edition, Elsevier Ltd., Britain, 2010, pp.253-257）
- (8) 前掲（2）p382
- (9) Tatyana Petukhova and Stephen D. Bonadies, Sturgeon Glue for Painting Consolidation in Russia, *Journal of the American Institute for Conservation*, Spring, 1993, Vol. 32, No.1 (Spring, 1993), pp. 23-31
- (10) Gustav A. Berger with William H. Russell, Consolidation of flaking paint films, *Conservation of Paintings Research and Innovations*, 2000, p.25
- (11) 前掲（2）p374-376



図1 修復中・画面部分図：ワニスの白色化

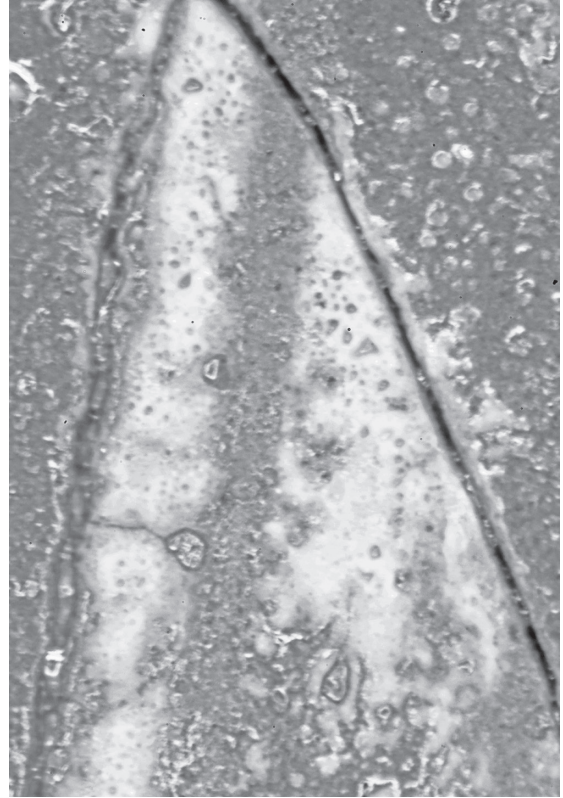


図2 ワニスの白色化 (×160)



図3 修復前・画面・通常光

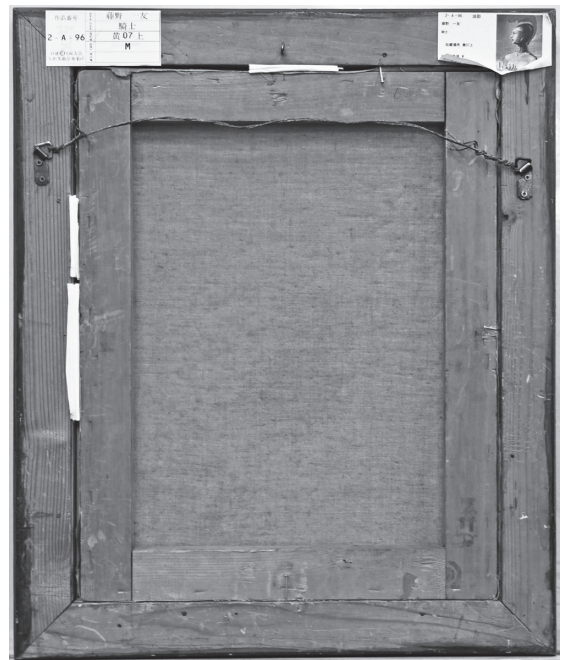


図4 修復前・裏面・通常光・額入



図5 修復前・画面・測光



図6 修復後・裏面・通常光・額入

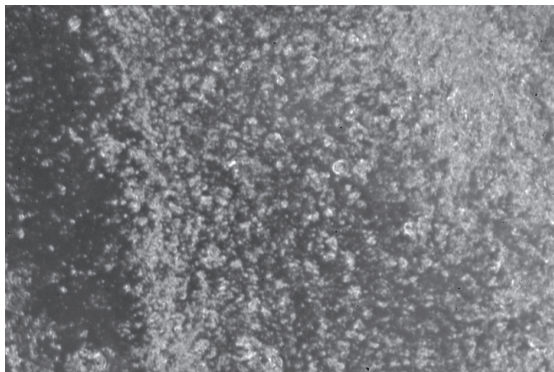


図7 シリコンシートを緩衝材として加温した試料表面  
(×160)

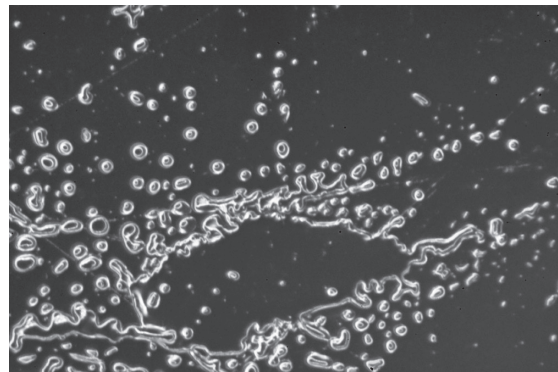


図8 PETフィルムを緩衝材として加温した試料表面  
(×160)



頁所載、有聲庵（粟田天青）「藤原邸曉雲庵初風炉」にも記録されている。

(43) 本書影印本上巻・三九五～三九七頁「○信濃町瓢庵の茶 四月十四日正午」参照。

(44) 本書影印本上巻・三九三～三九五頁「○小磯將軍新堀之茶 三月廿二日」参照。

(45) この茶事のこと、註(1) 前掲書の下巻・一六五～一六八頁所載「白雲洞茶日記 七月下旬より八月中」にも記録されている。

(46) 本書影印本下巻の「人物略解説」七三七頁に「倉知夫婦 仰木政齋次女夫婦」とある。

(47) 福井菊三郎（一八六六―一九四六）。三井物産に入社後、大正七年（一九一八）三井合名会社常務理事。また三井生命、三井物産、三井銀行、東神倉庫等、各株式会社の重役を務めた。陶磁器収集家としても知られる。

(48) 澤木興道（一八八〇―一九六五）、旧姓は多田、道号は祖門。曹洞宗の僧侶。生涯定住する寺を持たなかったことから「宿なし興道」と称される。昭和十年（一九三五）駒沢大学教授。

(49) 丸山鶴吉（一八八三―一九五六）。官僚、政治家、教育者。大正十一年（一九二二）朝鮮総督府警務局長、昭和四年（一九二九）警視總監、同十二年（一九三三）東京市会議員。同十九年（一九四四）宮城県知事、同二十六年（一九五一）武蔵野美術学  
校長兼理事長。

(50) 津守豊治（一八八三―一九六六）。実業家。大正四年（一九一五）奔別炭鉱株式会社専務取締役、同十二年（一九二三）東京電気株式会社総務部長、昭和十四年（一九三九）東京芝浦電気（現在の株式会社東芝）副社長、同十八年（一九四三）同社二代目社長。

(51) この茶事のこと、『日本の茶道』通巻一二二号（昭和十七年十二月発行）一三～一六頁所載、宗溪居士（松永耳庵の筆名）「飯後三茶会」の内の「松滴庵初陣」にも記録されている。

(52) 「兆殿司」（室町時代の画僧、明兆の通称）を誤記したと思われる。

(53) この茶事のこと、註(51) 前掲書所載「飯後三茶会」の内の「広尾其日庵三徳の会」にも記録されている。

(54) 越沢太助のことか。越沢太助（一八八七―一九七〇）、号は宗見。茶人。金沢の美術商の家に生まれ、呉服商「越中屋」を営む越沢家に養子入りした。裏千家流の茶人として金沢のみならず関東、関西の多くの数寄者と交流した。

(55) 「増芝端」（中国元時代の画家）を誤記したと思われる。

(56) この茶事のこと、『日本の茶道』通巻一二三号（昭和十八年一月発行）一六～一七頁所載、宗溪居士（松永耳庵の筆名）「三溪園銀杏供養」にも記録されている。

(57) 現在、福岡市美術館蔵「柿蒂茶碗 銘白雨」。

(58) 正しくは柏木貞一郎。柏木貞一郎（一八四五―一九九八）、号は探古。徳川幕府の普請方、維新後建築請負を業とした。古美術の鑑識に長じた。

〈主要参考文献〉

『人事興信録』データベース (<https://jaist.law.nagoya-u.ac.jp/who/search/who4>)

『昭和人名辞典』（日本図書センター、平成元年）

『東京人名資料事典』（日本図書センター、平成十六年）

『講談社日本人名大辞典』（講談社、平成十三年）

『角川茶道大事典』（角川書店、平成十四年）

谷晃『近代数寄者の茶会記』（淡交社、平成三十一年）



- 西伊豆の記」にも記録されている。
- (23) 現在、福岡市美術館蔵「金銀泥梅花図」。
- (24) 現在、福岡市美術館蔵「古雲鶴筒茶碗」。
- (25) 「行李」(荷物の運搬に用いる被せ蓋の箱。また旅の荷物のこと)の誤記。
- (26) 越野柏斎。松永耳庵に出入りした指物師。
- (27) 八代六郎(一八六〇—一九三〇)、号は城山。愛知県犬山市出身の海軍軍人。最終階級は海軍大将。男爵。日露戦争において巡洋艦「浅間」艦長として出征。大正三年(一九一四)年、第二次大隈重信内閣の海軍大臣。
- (28) 正しくは朝比奈知泉。朝比奈知泉(一八六二—一九三九)、号は碌堂。別号に珂南、不染盧主人等。ジャーナリスト。明治二十一年(一八八八)「東京新報」初代主筆、のち社長。同二十五年「東京日日新聞」(現在の「毎日新聞」東京本社の前身)主筆。
- (29) 広瀬武夫(一八六八—一九〇四)。豊後国竹田市(現在の大分県竹田市)出身の海軍軍人。日露戦争においてロシア帝国艦隊を海上封鎖する作戦(旅順港閉塞作戦)にて戦死。二階級特進して海軍中佐。軍神として称えられ、文部省唱歌『広瀬中佐』の題材にもなった。
- (30) この特別展観のことは、『日本の茶道』通巻一一三号(昭和十七年三月発行)三九頁所載、天青(粟田天青の筆名)「根津美術館特別観覧」にも記録されている。
- (31) 荻野仲三郎(一八七〇—一九四七)。日本史研究者。国宝保存会、重要美術品等調査委員会、史蹟名勝天然紀念物調査委員会等の委員を務めた。
- (32) 現在、根津美術館蔵の「霰地松梅図真形釜」(重要文化財)。本体の正面と背面にある陽刻銘は、正しくは次の通り。正面「奉寄進／高野山／宝幢院／西坊公用」、背面「永正丁丑／施主芦屋本／金屋大工／宣秀」。「永正丁丑」は永正十四年(一五二七)。
- (33) 正しくは「不苦者有智」。有馬頼底監修『茶席の禪語大辞典』(淡交社、平成十四年)五八〇頁。
- (34) 九代・大樋長左衛門(一九〇一—一九八六)、本名は長次郎。陶芸家。
- (35) 山下亀三郎(一八六七—一九四四)。実業家。明治四十四年(一九一一)山下汽船合名会社(現在の株式会社商船三井)設立。第一次大戦を機に巨利を得る。他に浦賀船渠(現在の住友重機械工業)、扶桑海上火災保険(現在の三井住友海上)等を設立して事業を拡大し、海運業に多大な功績を残した。
- (36) 「長谷川某氏」については不明。
- (37) 木島桜谷(一八七七—一九三八)、本名は文治郎。日本画家。別号に龍池草堂主人等。十六歳の時に今尾景年に入門。早くから才能を開花させ、文展では明治四十年(一九〇七)第一回から六回連続で入賞するなど数々の受賞歴をもつ。京都市立絵画専門学校(現在の京都市立芸術大学)教授等を務めた。
- (38) 古野繁実(一九二八—一九四一)。福岡県遠賀郡出身の海軍軍人。真珠湾攻撃において特殊潜航艇による特別攻撃隊として参加、戦死した九名の内の一人。二階級特進して海軍少佐。「九軍神」に数えられる。
- (39) この茶事のこと、註(1)前掲書の下巻・一五八—一六一頁所載「信濃町瓢庵茶事 四月十四日正午」にも記録されている。
- (40) 正しくは健太郎。山田健太郎(一八九七—一九八〇)、号は瓢庵。美術商。東京美術倶楽部の監査役、同第六代社長、同取締役会長等を務めた。
- (41) 正しくは保次郎(健太郎の父)。山田保次郎(一八六〇—一九四三)、号は松荷庵。美術商。明治二十八年(一八九五)に茶道具店「玉鳳堂」を創業。
- (42) この茶事のこと、『日本の茶道』通巻一一七号(昭和十七年七月発行)二一—二三

〈註〉

- (1) この茶事のごとは、松永耳庵『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・二二一―二二三頁所載、横井飯後庵（夜雨）「柳瀬山荘」にも一部が記録されている。この時横井が柳瀬山荘に着いたのは夕方、仰木と丸岡はすでに濃茶を拝服し、茶碗拝見の折であった。その日横井は山荘に泊まり、翌日も行われた松永の茶事の様子を克明に記録している。
- (2) 前田南斎（一八八〇―一九五八）、本名は兼吉。木工芸家。特に桑材を用いた作品を得意とした。
- (3) 裏千家の茶人・石川宗寂（一八四九―一九三九）は、この時すでに故人となっている。仰木の記憶違い、または別人物の名を誤記した可能性が考えられるが定かではない。なお石川は『雲中庵茶会記』において昭和六年十一月二十九日条「星ヶ岡寮会」（本書影印本上巻・一二〇頁）に登場している。
- (4) 「遠藤老」については不明であるが、或いは遠藤為春のことか。遠藤為春（一八八二―一九六九）、本名は弥市。別号に翠玉、城州、泊堂。歌舞伎研究家で、松竹取締役を務めた。
- (5) くしこ（申海鼠）。腸を取り去ったナマコを茹で、串にさして干したものだ。
- (6) 村彦兵衛（一八六九―没年不詳）。金沢の素封家。
- (7) 「十巻抄」を誤記したものと思われる。
- (8) 「兀庵」（南宋から渡来した臨済宗の僧、兀庵普寧）を誤記したものと思われる。
- (9) 八田円斎（一八六二―一九三六）、本名は富三郎。美術商、陶芸家。金沢生まれで、茶道指物師である父の影響で幼い頃から茶に親しむ。上京してから美術商を営み、陶芸家としても活躍した多彩な茶人として知られる。富雄はその子息で、美術商。

- (10) 松本長（一八七七―一九三五）。シテ方宝生流能楽師。八田富雄の義父。
- (11) 仰木魯堂の次男・茂（一九〇四―一九八二）とその妻ゲルトルート。同夫妻については『中間が生んだ茶人 仰木魯堂 仰木政斎』（中間市教育委員会、令和元年発行）八―九頁に詳しい。
- (12) 本書影印本上巻・三五七―三五九頁「○葉山静養魯堂を見舞 七月十七日」参照。
- (13) この茶事のごとは、註（1）前掲書の下巻・一四五―一四九頁所載「連会感想―自茶―」にも記録されている。
- (14) 「宗甫」（江戸時代前期の茶人、山科宗甫）を誤記したものであろうか。
- (15) この茶事のごとは、『日本の茶道』通巻一〇号（日本の茶道社、昭和十六年十二月発行）四四―四六頁所載、耳庵叟（松永耳庵の筆名）「禾日庵、古法の口切茶事」にも記録されている。
- (16) 現在、福岡市美術館蔵「布袋図」（重要文化財）。
- (17) 現在、東京国立博物館蔵「柿本人麿像」。
- (18) 現在、東京国立博物館蔵「芦屋松図真形釜」。
- (19) この箱蓋裏の朱書は、実際には下記の三行である。「松地紋芦屋釜／松永弾正従／信長公拝領」
- (20) この茶事のごとは、『日本の茶道』通巻一一号（昭和十七年一月発行）三七―三八頁所載、集雪庵「制海」の釜かけし夜雨荘」にも記録されている。
- (21) 水谷川紫山（一九〇二―一九六二）、旧姓は近衛、本名は忠麿。男爵、貴族院議員、春日大社・談山神社宮司、華道「御門流」家元。近衛篤麿の四男に生まれ、長兄に文麿、次兄に秀麿をもつ。水谷川家の養子となり家督を継いだ。
- (22) この伊豆旅行のごとは、註（1）前掲書の下巻・一九六―一九九頁所載「正月の熱海、



歳末には誠に申分なき  
歌の意味外一首

表装 小紋  
金襴 釜 釜  
鉄附雨ツラ

時代  
香合、志野、加羅



不昧公旧蔵

炭斗 權組  
羽根鶴 鉄細圖  
灰器 備前  
匙桑柄

お炭はいつもの通り奥さんのお手にて至極見事  
な景色に組入られて香器拝見す

加羅の姿も替り  
目珍しき作り

仕お懐石は  
向器 唐津  
貝柱ラロシあへ  
汁 地味噌  
ヤキねぎ

碗、餅、鴨  
丸平鉢

焼物 クジ  
北海産

器 九谷浜田屋在銘作  
柴附長角

進魚 この緋  
柿右衛門

煮物 合鴨大根  
鉄鍋

にて八寸 越後かに  
自然芋 黒織部  
丸平鉢

香の物 京の  
スグキ 器 虫明窓  
四ツ手網形

酒器 黄銅銚子  
徳利備前



杯 浜田屋作  
葉 子栗餅始め蓋物に  
盆朱塗



已上 時節柄にもお心入れの献立は飯後茶とも思へず  
配給生活の我々に八過分なお振舞に恐縮

して中立  
いつもの名銅羅を聞き再入席すると

お炭直しが  
あり水指連び南蛮  
頭

茶、古瀬戸、鈍翁銘  
銘白髪 挽家

茶杓銘 清蔵よりと筒書

茶碗 釘刻伊羅保  
銘音常寺

建水曲 お茶は 時節柄不自由ゆへお水屋にて  
お挽立との事それ程香

誠にく結構であつた

茶の本来でもあり

さて以上何れも  
良いお取合であつたが

中でも茶碗は兼てお当家の伊羅保ハ釘刻中東都第一の名  
碗と噂に聞及び、この秋箱根でもお使い其の折自分ハ病氣

とて不参拝見出来さりしに今日からはからず拝見せる仕合 この茶碗ハ大振にて望々たる姿 殊に  
見込に赤味を帯びており高台一ヶ所窯破れあり 実に見事な茶碗である 自分は本来

伊羅保茶碗にハ其何れにも餘り興味を持たぬ者だが此茶碗は流石の高級の茶碗と稱する物と  
である 猶箱根の折の伊羅保ハこの音常寺でなく、元加賀にありし銘隆嶽と稱する物と

迹にて聞いた。訂正 今日  
の茶ハ記入が前後したが

禾日庵主が 食器の用い方を見ても一品何万金  
の高価な物も使はず時に応じて色

々配合せられる手腕にハ  
いつもながら敬服する

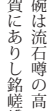
お食事後のお淡ハ 気分も更り  
興味深く

水指 手附曲 茶、高取  
敏鎌

茶杓ハ 時代  
茶碗 井戸脇 唐軒手造  
小服 黒筒

お菓子 宮家お下賜 盆 唐物輪花  
菊花飾入 盆 黄銅ブク輪附

猶特に今日花入に 宗和作  
尺八 花ハ山樞であつたが この花入は元赤星家伝来にて  
裏に金文字にて宗和作とあり



寂び竹 宗和中これ程の花入は  
片身替り 他に見られぬ程である  
拝見し一入其の感を深くしたのも仕合である

人心苛立つ折り歳暮の茶を頂き 一時の無我の境に過ぎしお主人の厚意を謝しお聞き 洋間  
に移ると青磁鐘椀人物の置物あり 除夜にも程近き

この深夜に対する意味もこもり  
其の巧者振りといふ人に感謝し

耳庵翁の車にて門前迄送られ帰慮した。

### 〇戸越八田君正午の茶

十二月廿九日

P 423

あわただしき今年も押迫つた今日八田富雄氏から松永さんを一度お越を願いたいとの事  
でお携してお携して出掛た

招待合に通ると(松永さんと予の外お中間の 水戸幸 両君と云ふ組合せ)  
寄附二ハ 澤庵の若雁の幅圖 釜 重ね菊文 香合 伊賀の 炭斗 藤組 雑器一式 普通にて 灰器  
和尙 鉄海老 四方

懐石ハ キス 細作り 甘酢器ハ 寄せ 九谷、志野 汁 三州 小蕪 碗 貝柱  
器 ハンネラ 唐津 小蕪 トワフ 焼物 鱈粉引の鉢 進め魚コノ緋  
強魚生ゆば人參若烏

八寸 蟹のむき身 瓢形 香物 千枚 鉢雲鶴 菓子しるこ にて動坐 中入後席には床 破り花入  
外二種 器 ハンネラ 香物 漬 鉢雲鶴 菓子しるこ にて動坐 中入後席には床 破り花入

建水 予の旧蔵 獅子王向玉 二種を挿け 水指 南はん、赤繪蓋 茶入 丹波と云ふ 茶杓 有楽 茶碗 刷毛目  
梅沢伝来 臘梅 二種を挿け 水指 南はん、赤繪蓋 茶入 丹波と云ふ 茶杓 有楽 茶碗 刷毛目

砂張 にお茶を頂く 広間に移ると床に 為恭筆 金襴手 花入 床脇是真筆帖 棚水指と云ふ  
七福神 手附 花入 床脇是真筆帖 棚水指と云ふ

あつたがお淡ハお辞退した。連客が商人斗りで松永翁も大気煥に歳末のウツを吹飛された。

八田君ハ先代田斎老と共に良く釜を掛られ茶客を招かる。山澄先代逝きし迹当代及水戸幸

君と共に青年茶道員商中この三君丈が釜を掛る外他に見当ない存在である

この歳暮茶により新年七福神の舞込事を祈りお暇した 歳暮圖上の寒さ骨身に込む

猶後日故翁に縁故深き安田小林前田の諸画伯も招かれたと聞くも懐し事である

### ○大東亜戦一周年の茶 於柳瀬荘 十二月八日

P 420

日米戦以来既に一ケ年 其間多くの尊い犠牲者赤子を生じたが、一死ただ奉公の誠心から、陸に海にハタ空に偉大な武勲を輝し今日迄国民亦一身同体の苦難に耐へ幸い戦勝を続けつつあるも、如

何せん資源の封鎖は鉄の一片さへ捧げなければならぬ苦情である 如斯際一般国民はすべて憤む維ではあるが人心を鼓舞するには、其一周を紀念も亦愚ふべくと耳庵翁の紀念茶が催れた。

参する人々ハ (近藤滋弥男、團伊能男、田中親美翁、魯堂未亡人、と予の五名)

冬がれとは云へ また秋の名残を留めし山荘母屋広間が 壁床に石州の消息文 三尺餘の車軸大火鉢二大応庵四方釜と云ふ

寒さをしのぐお主人の心入れ 備前振出を時代盆に備らる 田舎屋「面白く お迎へ附に露地伝い、下手物波出しに らしくて 土肥三好の且坐席へ

二床に「其行の保養父切 さよふけて云々」 台紙に 釜ハ 古芦屋 時代ハ、無地呉須、家の集 飛雲あり 馬地紋 縁 局柿 香合 台牛 の名器

お炭ハ省略され 懐石 向 鱒細作り 唐九郎 汁 地みそ 碗 鮫鱈 志野鉢二 鱒の 強魚 大根輪切 香一炷の後 器ハ織部 作 小 煎 切 身 塩 焼 味噌かけて

進め魚 ウルカ 器斑唐津 八寸 百合 カラス身 香の物 一夜 器 マダラ唐津 酒器 鱒子赤絵獅子アタ 杯 金欄手、黄瀬戸六角

徳利粉引 菓子栗餅と云ふ戦時急迫料理にも戦場を偲びては此上ない甘味である。

お食事をおわり 林間に設け 腰掛に中立 幸ひ冬の日も 暖く間もなく 砲弾ならぬ銅羅の音ハ木枯をかすめて

鳴り響く 鉦ハ加州の住人魚住の新作餘音ハあるもヒビキ強く薄作の為ならん深みなきを遺憾に六点迄打ち込まれる お主人のお手練に感極る内、一点の打残しにてお出迎いハ正次

客お二人えの敬意であるか御趣味からか誠にお可■なお振舞に再入室 床に遠州作「重切

花野菊の 花残花 が檜の紅葉と共に 水もしたたる 風情に挿れてある



水指 木地 茶入 広沢 浅黄地 茶杓 氏郷作 茶碗 有菜 建水 水指 曲 本ヶ 袋 金欄 共筒 井戸 名物 南蛮 と云ふ大名器

揃いにて おこそかな が練られる 翁のお手前も、イツよらぬ謹厳ぶり 客亦之れは容易ならぬ名物の出現として総帥の元に雑兵なくと見守るばかりである。

器物拝見茶碗は玉のよふな名碗茶入亦名物として広沢中の優品茶杓ハ之又氏郷作の右に出る物なき作品ハ秀吉旗下の勇将家康の心胆を寒からしめし丈豪健の中にも侘びあるは有楽井戸に対し少しも遜色なき茶杓である。翁が巨財を投げ打ち同行者をアツト驚した品々である。翁の得意

や云ふ迄もない 扱広間に移ると信実三十六歌仙佐竹本中其巻頭住、吉を掛られ 備前片壺 花入に山椿

を活られ書院にハ 光悦、 炉に松永釜と云ふ大盤振舞であった 然し住吉巻頭に備前の片壺ハ一寸と不釣合である 寧ろ無き方よからんと思はれた。以上

口切の茶であったが懐石に不自由ながら何とか具風のありしものと考へしは時局を知らぬ我らのヒガ事でもあらん。お聞き後山内の秋色を賞し東山春草應着りより見る武蔵野の杜が日圓旗の風になびくも紀念を祝す民草の誠心志本を経帰京

### ○塩原禾日庵師走の茶 十二月廿六日夕

P 421

塩原奥さんから四時二十分と云ふ時間指定のお招きハ 戦時体制とて或は最近行れる飯後のお催ではあるまいかと定刻中間より庭を経て洋間に


既に田中親美翁あり 引続き御連客 (加藤厚水博士 松永耳庵翁 杉本九八郎翁 予と共に 五名)

御主人自ら栗時代盆にお湯を進られる 松永さんから四時二十分の御案内について何にかお意味でもあらんと質議せられたが、主人ハ笑つ何の意味もないとお答へ

寄附に 鈍翁筆の三字が掛られてある この庵号は予の手にて刻した木額の下書をお幅に仕立られし物、扱ハ来る廿八日鈍翁忌日前或は追福の意味ではある

いかと予は想像した。禾日庵に入席すると定家卿筆「五十番 へたてゆくよものおもかけかきくらし」歌合 雪となりえる歳のくれかな



風炉  朝鮮大甕 釜 眞 鉄附鬼 高サ二尺程 水指釣 木 茶入、金、林、寺、（マ） 裏二、如意輪寺、の朱書

茶杓 唐軒作共筒 不見老へ 茶碗、（マ） 柿の帯、不味公旧蔵 建水、朝鮮砂、張り 不味公在判 銘、白雨

已上 三溪翁好 大瓶 打割風呂も面白く 古瓢花入との佐びに金林寺ハ天下一と自称せられし無類の品に柿の帯との組合は翁其のままの姿であり水屋にて中村氏の采

配苦心の程もうなづかれる。ハ木枯と云ふ柿の帯を お所持であるが白雨のこの茶碗が自然釉湧きうるわしく茶碗ハ白雨の外翁 故老ハ名の如き木枯を愛されしよと思はる。

茶杓ハ 唐軒として最も佐びたる作にて、（マ） 兎喰とも名附しか。扱お茶は、トナタが点るかるまい或ハ裏に数ヶ所刀痕あり之れにより

以前よりお抱の老女かと思いに 今は客なり主人であるから 私がお茶を点てますと 水屋から 耳庵翁ヤラ席を立ち 道具置に直られ

香具取出し 香一炷されて より香器拝見を望まると意外にも 「藤原時代 錫緑 ではなく 正客 宝来山時絵 長角

いか これは意外の名室にて この佐の極致の中に 精緻極る名香合の出現にハと喜びやら驚嘆 一同目を見張るばかり やら一坐下ヨメクもことわり

この香合につき予ハ前年春草廬有樂の席にて拝見の折 翁の直話に、これは元柏木嘉一郎 （マ） 氏旧蔵なりしを翁死去後梅沢持来り価甚千金ト云ふ今より四十年前以前明治四十一年故当時

一千金ハなかなかの高価ゆへ一寸考へたが見逃も残念少し値引してと梅沢に交渉すると梅沢ハ之れ程の名品をお値切りなさるとハと容易に聞入れず 止むなく歯を食シバリ求めた

物だと当時の様を話されし事あり。然し自分は浅見ながら、今日迄諸家で拝見した時代時絵香合中益田家雷紋香合に次く名香合を其当時より今一度拝見の期を持ちしに今日からはからず

再見する光栄ハ此上なき仕合であつた。金地螺鈿ニテ松に竹水ニ鶴ニ羽見エテ内部見返鶴五羽時絵ニテ裏にモ松竹鶴の絵アリ至極精巧ナリ

お茶ハ耳庵翁お手練として至極良く練られ一同有難く拝服した

高僧の遺蹟を語り天平の至上芸術を語りお茶をすまして、元の落葉を踏み池の辺を橋を過ぎ天授院よりの溪流と左の山より落る瀧との合流点十三石塔を眺め瀧の下流なる「聴秋閣」に入る

閣上にハ、（マ） 不味公筆、二字の木額懸り この建物ハ天和九年將軍家光上洛の折佐久間將監により將軍の為特に設けたる由緒あり異風な構造にてこの床にハ

三溪翁 遺墨、人物 讀に 「長揖子雲山相為霜善我來欲寂棲時有白雲記 泉湧洞中白鹿無 東浴閑松石疎雲枕青春睡足山 甜可醉之時雲無睡百年雲与我 碎

洞中天 昭和八年晚秋於白雲洞 三溪并題 長書院にハ唐代、（マ） 金銀雲鳥、三足香炉 天安五癸未年 五十ノ内、（マ） 朱書きある 東大寺四聖塔、クルミ足丸盆へ 等が飾られ

上段の間にて番茶菓子など振舞れた末 中村氏の厚意に 依り奈良法眼 と伝へられる山水を賞観したこの折名古屋森川如春老が福田喜兵衛君と来り、今日田中氏を訪ねし二御当家へとの事に遅がけながら福田君と共に馳せ付けたと時刻遅れしお残念がられ暫し今日の催のさまを物語り、溪流のセセラギを聞きながら天授院に圍る院の高丘風光明媚を賞す、特に院の開扉を願ふ

本尊不動明王 鎌倉期を拝す 堂内にハ平安期木彫聖観音像外仏器齋具一式が備へられ 中にも鎌倉時代螺鈿の礼盤のスパラシサ、見る毎ことに其の優秀さに敬服す

時に暮色ハ青松紅葉に映する夕陽と共に深む月華殿の広間、（マ） 金毛窟、など数度お茶を催されし偲出の建物に哀愁を残し山お下り、家族の方々の一に行に對す遠慮を与へぬ為お姿さへ現れず萬事中村氏に一任せられしお心つかいを深く感謝し名残をおしみお暇した。広い蓮池の水鳥も今ハ主なく初冬に水涸れし荷葉の陰に何思ひけん一声あげしを聞つつ桜木駅に出で 帰京した。

京都一流の数寄者得庵翁に対し何の遜色なきお振舞でもあり相伴の我々亦望外の仕合を謝してお暇した

## ○蓮華院公孫供養の茶<sup>66</sup>

十一月廿六日

P 416

原三溪逝かれて早三周年を過ぎた

翁在世中ハ秋ともなれば公孫樹散る蓮華院にてアノ黄葉落散る幽邃な頃例年茶を賜りしにと当時の事共追懐し耳庵翁とも此季節に

今一云蓮華院での思い出をこの三ヶ年を迎へしを期して其頃の茶友と共に語り合ひ度ト相談せしに、それは何よりの事早速中村君を通し横浜に申込まむと賛成せられ氏に其勞を乞い置きしに、原家でも心好くお快諾今日其催となった。原家からも時節柄成べく当時故人の最も親しかりし同好の少数丈にとの事で

参列者ハ(井上侯爵、松永耳庵翁、八代幸雄、田中親美翁二子、中村氏)

扱お案内にハ(横浜クラブにて正午の食事を、差上たいとの事で正午迄同ホテルに勢揃いすホテル、同所にハ横浜サムライ商会主兼ホテル主管たる

野村さんが出張さる。同氏ハ故三溪先生とハ特別の關係から特に自ら料理献立テーブルに至る迄配慮

ては此上なき献立にて主として故人がお好であった調理の数々のよふであつた

野村さんも同席共に望外の洋食にあり付き、三溪翁の料理についての思い出から翁との永年

間の逸話美術に対する造詣の深さなど語り合ひ至極なごやかなりしは近来の快事であつた。

中村氏ハ会食中坐せられ蓮華院での準備に出掛られた。但しこのお食事は原家にお迷惑を掛けてハ相済ぬと耳庵翁から自弁せられたよふだ

扱食事が終り一同車にて久し振り本牧を経て三溪園に繰り込む。園内ハ当時盛夏の朝茶な

どの折と違ひ大蓮池ノ荷葉は晩秋にスガしている。本邸天授院上の松林と対峙する大塔の聳ゆる壯觀にハ何の変化なく、人ハ逝きても其の遺業文化は、永久である。二三日前の大風にもいまだ名残を留めし紅葉と好晴に恵まれし日に訪ふ毎に見る乱舞の鳶の群にも何にか深い思い出がある。家従笠原君の出迎に庭園に入る。桃山遺構と裏山の対照の良さこれ皆故翁の造詣に依る物其の偉大さ今更ながら敬服する。池のほとりを過ぎ叢林の溪路に入れば苔むす石椁古燈籠など翁生前のままにて公孫樹の黄葉は前日に風にて黄毛氈を敷しかに通路をうずめている古塔の迹に点在する礎石は古寺の遺蹟を偲はせる

蓮華院ハ前後山に囲まれ奈良秋篠寺にありしと云ふ燈籠も佯しく熟せる軒端の柿の二ツ三ツ小鳥のツイバムもうれしく正に仙境である。院の土間にハ藤原期の長身大の聖観音の尊像に詣し長四畳枇杷床つき広間に通る

床にハ(翁秘愛の名僧寂心和尚墨蹟を掛られ「表装中上代紗蓮華文金襴」と云ふ翁貞観時代上下単地モミ紙一風印金」好み表装

枇杷床えハ(東大寺、不空像の持物蓮華、と云ふ天平芸術の粹を極めし経凡八寸に渉る三月堂、蓮片のあさやさは驚く斗りである

右二品共(翁在世中よく我々にしめされし逸品にて特に寂心墨跡ハ細字であるが既に其の文字ハ和様風であり現に国宝に指定されある

蓮華ハ(現在も花片ハ八葉残り、精巧極る美術品にて我ら工芸家にとり奈良芸術の優秀さをメス花心の蓮葉と共に、好参考品である

如斯を名迹珍宝を拝見しながら、ここにてお菓子頂き、貴人口より一応庭に下り立ち、大自然石ツクバイにて身を浄め二畳中板の小間に入席

床に古瓢を掛け(花寒菊一輪、このふくべ箱裏二「休所持瓢花入、宗左、銘老茄子と号」トアル、宗日書附、伝来

○ 今日お連客ハ (塩原お夫婦 服部正次氏 一門に予)

寄附ハ母屋 敷台より 壁に 宗久消息 云々 鉄 形 瓶掛に 根来 丸盆に

眞盆 舟形 火入 雲 お主人の迎附を 落葉の庭を経て不日庵翁先頭予殿がりにて軒の熟し

床 桃青落款 小是非何処完 と題し 「こちらむき我も はしを」 西行歌聖を

十一月月中旬予は口切のお催しと思いに翁にまだ名残の気分うせずお席の句 然し野趣はま

だまだ名残として不思議やあらん。夜来の風に落葉踏せる露地の風勢にも殊に武蔵野を眺めてハ

尤も至極である 風炉 大やつれ 板信楽にてお懐石が進らる 向 器ハ 唐津 汁 地みそ

碗 とうがん 焼物 キスの開キ 丹波の鉢 煮物 八寸 生貝 吸物 針 香の物 澤 黄瀬戸ドラ鉢

菓子ハ 焼 頂戴した 名残と云い時節柄でもあるが耳庵翁流至極お質粗なお献立そこに翁の

後席花入 瓢宗自作 露 香ハ 独楽宝珠 毎度拝見しても 水指 伊部ハ 花入に

茶ハ 織部 茶杓 茶碗志野鼠にて 濃茶松の白は良く練れ然も大服にてトテモ

引続きお淡ハ葉罐水指 茶ハ 少庵好 中次 茶碗 刷毛目 銘蝸牛 この茶碗ハ式守宗匠への為ならんが、予

茶を呑む気も起らぬ程のイカ物である 広間でハ春屋筆 古備前 花入白玉等にて佐本意のお

○ 近藤其日庵 飯後の茶 十一月十六日

P 415

時局の逼迫から お数寄者も近頃控へ目になったが数寄な道はこの不自由の中にもいら立つ気分を柔

得て午後二時半仕度中 参入すると (京都野村得庵翁を初め春海、服部若主人 予と云ふ大勢)

狭い待合ハ寿司詰め 床に夢、想、国師の一行 波出朝日焼 盆 鉄刀木 丸炉に 手取 眞盆 火入

などが構られ 釣棚に 緋色紙上に 時絵小瓶 已上にてお主人お迎附に正客争いありしが、遠来の野村さんを先頭に

床團 芝瑞、竹の画 益 与次郎作 銘明星丸 縁 時代 茶ハ 袋のまま お主人より時節飯後の催

懷石のお連客 四方箱膳にて 寿司詰 小丸椀に海老叩き 貝柱の ヲロシ 器 神右衛門 銚子 鉄、赤絵八棱形

已上 簡単ではあるが飯後にハ 栗の 重分の量にて美味に頂き 菓子ハ ツプシ にお進め上手に数盞を傾け寒さも忘れ腰掛

洲浜形が備へられあり 中天にハ五日頃の月 を眺めている内 お迎附により 床に 古銅 花紅椿一輪が挿れ 水指真の手桶

茶ハ 漢作 銘宝珠 袋嶋 益 縁連刻見込 牙蓋 島津家 茶杓 古織作共筒 歌銘 筒添へ

茶碗 切呉器、フクサ 建水 砂張 蓋置 朝鮮 已上 遠州流お手前にて練茶を進られ誠に結

右の内お茶ハ漢作なるも肩衝程のイカメシさなく柔い感じ形ハ大振り耳ハ短冊切のよふにて袖掛りもうるわしく

作も良く名茶杓であった。 代点にて淡茶 水指 法隆寺 鍍金桶形 塗リ 茶入金 林寺

茶ハ 絵高麗 替朝日 茶杓 象牙利休所持 水指 仏器のお扱と云い前席経筒花入などとお用

絵高麗ハ普通茶家の賞す形より図の如く深く、見込に土見輪もなく、巴に算木模様、縁に魚の

絵あり 外部釉薬ハ茶褐色を帯びイタツテ上作な茶碗である。高台廻りより土見ハ梅鉢と同じ

扱お淡を頂き露地に 下ると秋の日の短く庭に射す月ハますますさへ露にうるおふ下草の銀滴を踏みつつ広

床にハ 狩野正信筆 脇床にハ 金襴手 石は豊富なお蔵品と驚く斗り 猶水菓子

器九谷の大鉢ハ色絵鳳凰の翼を張げた雄渾さハ守景下絵ならずは描けない名鉢であった





聴講者ハ澤木丸山鶴吉翁津守東芝副社長、同夫人、小林古径画伯、横井半三郎、縣次郎、吉田幸太郎、粟田、阿部の諸氏に予、先づ先着の横井老ら

と二三の席で、道也大やつれ、古、芦屋、に飾り、山路の菊を、に香炉、に、松の木盆、香名、、羊かん

水指 古備前垂 茶入 竹の 茶杓 宗和 茶碗 瀬戸黒、鶴太郎の大振にて、かし

喫茶後軒端の柿の色つきしを賞し園内を逍遙する内、各羅漢連到着間もなく、母屋にて

床に 文殊菩薩、 床脇 推、古朝の 鍍金柄香炉 期、と云ふ、美術、 夜雨老位いで

献立 松茸、 豆腐汁 野菜の 小芋の煮 と云ふお齋料理、十二人と云ふ善玉恵玉の雲水とて

禪話 道正禪師についてであつたが罪深い我らにハ、一度位いで解説も出来ず、其場限りに謹

法話後 奥の広間に 山水の条幅 を眺めながら茶果の接待あり、一部ハ帰京、古後、縣予吉田ハ迹に残り

## ○夜雨老お粥の茶

十月廿一日夜

P 410

横井老と柳瀬莊禪話の折、貴老も大分胃痛でお悩みの様子ゆへ近い内お粥にて一服さし上  
たいとの茶友の好意に過す内今宵其のお招きにあまへて出掛く

いつもの階上洋間に通ると、瀬戸の陶工 加藤、藤、九郎君に、二人、 藤九郎君にハ三度会いしが

床にハ鈍翁筆 「大風のあとも見る田の面」 主人ハ羨し程季節向き


古卓上 二、推、古、火中、 茶浪博上 二、凡そ掛けはなれしも、 老の趣味面白く お湯を頂き、ここに

鈍翁幅 「風にあお、小葉にすたくさきりきりす」 朝鮮、 釜かけ 香合朱、 懐石ハ コチ、 入りの粥、榎栗、


小鯛皮つき 甘、汁、名残、 岐草蓮根、煮物、海老手、 インギン、野、 スープ、など病人にと特別の心入れ

ぬ配慮に恐縮する。茶友に対する夜雨老こそ、自己を捨てての心遣い、これでこそ誠の茶の

極致である。時節柄万物之しき折とて一会を催すにも容易ならざるに、この献立の裏にひそ

む御苦心を私は深く感謝する、お手製の栗絞りを頂き中立、後席、白さび、 花入、 花

うるしツタ紅、花入ハ老好飄阿新作、葉あざみ、 ながら面白く花との釣合いよく、水指南蚕、  茶入 尾州家、 お庭焼、茶碗、 熊川

建、 蓋置朝鮮、この建水ハ、 金味作行きも誠に良く、疵多く、 にとりては何のクッタクなき物

夜雨老にハ、打ちつけの佐ひもの、 名器一ツに苦む貴人茶家より我々にハ老の如き茶友を得し喜

明治節團家のお茶 原宿にて、十一月三日、P 411

## ○明治節團家のお茶

十一月三日

P 411

團家ハ、我々兄弟にとり一方ならぬ恩顧を受けしお家にて、 先公不慮の他界後も芳子刀自又同よふ先公同じく美術に茶に親し

あの大邸宅も時局柄個人独占すべきでない、其の過半以上を分譲されると時宜に適した英

断で決行され、残部を整理してこの頃完成したのを期に、茶友を招き飯後の催しを続けられ

と聞きしに、今日の佳日予も亦その、（松永耳庵翁、田中親美翁、 式守蝸牛老、中村好古主に予、

この日天気明澄一片の片雲なく、神宮社頭ハ、 国家の武運を祈る赤子の群に皇室に対す尊高

出迎いの家従に導かれ寄附に、待合にハ、 田中中村氏あり、間もなく松永蝸牛の、 両翁参入

十時頃から雲も切れ陽さしさへ見え愁眉を開いた。

処が不幸にも自分は此の日特に胃痛甚しく、応急所置も行ったが参列処でなく、主催者や参列の方々にも申訳なく何とかしても出掛る事ハ不可能となり、残念ながら老妻と倉知夫婦(46)を総代理に焼香前に参列させた

式に参列されし方々ハ 團さん 藤原銀次郎氏お夫婦、福井菊三郎御夫婦 畠山お夫婦、松永さんお夫婦、田中親美翁や

横井夜雨氏ら多数であったよし 遺族として光栄であった 自分ハ不参加の為、式の時刻自宅の床に遺墨拾得の幅を掛け

之れも遺物茶碗破れ袋にて焼香一服献茶している折、縣次郎君が兼而氏に依頼して置いた写経用の巻を今日の年回に間に合す為昨夜遅く迄に製作して出来上ったからと届けられ、其の好意を謝し共に一服喫し合い氏ハ護国寺に向はれた

この日の護国寺に於るお茶の模様よふハ不参の為詳しハ不明なれど凡左の通りであった

△先づ、化生庵、主吉、田梅露氏席

本席床、魯堂筆、画讚、風炉破れ、肩蔽、水指、信楽、茶人、薩摩、茶杓、遠州送り筒、釜真形、共蓋、耳付、銘有明、茶杓、宗慶箱

茶碗、柿の蒂、建水根来、鼠志野一重口、菓子、きんとん、盆、以上、雲州家蔵、輪花形、盆青漆内朱、光琳絵

広間、行成大字「たちねはかくれとてしや鳥羽玉の」花入、古銅、花鉄仙、書院時代鎌倉経巻、朗詠集切、我黒髪をなすりやありけむ、経筒、箱同時代

風炉、唐金、釜真、風呂先、華燵、長板、水指、砂張平、茶人、石州好、切合、凶仏抄切込、飾、鉄鉢形、吹雪面取、茶杓、魯堂作、銘しのぶ

茶碗、蕎麦、建水瀬戸、菓子、蓮、火入古赤絵等々、替へ、黄瀬戸、蓋置、鍍金蓮坐、片打物、苺盆真塗

△艸雷庵、主八、田富峯君

寄附、魯堂筆、眞盆桑手附、本席切、石山、青磁、雨龍耳、盆堆朱蓮刻、観音の幅、火入祥瑞詩入人物

風炉、鉄ヤツレ、遠州好、七宝、板織部、香合、平、炭具式、水指、備、茶人、唐物丸壺、盆五葉、釜、透、独菜

茶杓、宗旦、茶碗、高麗、不味公箱、建水、置青竹、お菓子栗キントン、お茶代々木の杜、以上、右の外、共筒、銘面壁、曲、森八製

持寄席として円成庵に八床、貫行、美代さん出品、花人青磁、宗旦、花の節、花むくげ、同じ、風呂やつれ美代さん、集、竹の節、釜古声屋、茂

茶杓、江雲、作茂、茶人、時代ツタ、利休、政斎、茶碗、鼠志野、耳庵翁、香合、時絵長角、和尚、魯堂旧蔵、漢東、袋、出品、美代さん

建水、蓋置、竹、広間不味軒、床、「一休和尚、耳庵翁、魯堂旧蔵」、床脇飾、魯堂写経未完成、曲、出品、二行、出品、に遺族有志追写の巻

茶碗、長次郎、耳庵翁、御出品已上松永さんの御厚意により亡兄旧蔵品の部御出品の外遺族近親所、尼寺、有物により御来賓の方々に御茶さし上と老妻より会記により

茶室月下窓を■さす炉辺にて記す。

### ○柳瀬莊禪話の茶 十月十八日

P 408

病疾に悩まれ魯堂追善茶にも、不参した程の苦痛も永年の疾■とて少し良ければ性癡りもなく、喫茶に製作し去年魯堂の死より我亦患質遺病の変化をおそ

れ静養につとめ暫く外出を控へしに、秋色もよく運動をかね澤木老師(48)の禪話でも聞かれたらと耳庵翁の進めもあり室内ばかりの憂鬱に久し振の柳瀬行き、戦局は赤道をこへての遠征何となく不利

な情報さへ伝へられ且ツ我が艦隊は其の武力を失い敵の艦上機ハ我が本土をおびやかすこの頃交通ハ益々難行を極め東上線にも死物狂いの有様であった。

東上沿線も以前は板橋を過ると畑続き野趣に富んでいたが、大戦後ハ工場と共に小住宅の乱立で風致も朝霞以北でなければ見られぬよふになった。志木から陸稲畑の野道ハ又捨がたい物がある。柳瀬に八九時過に着く

開き 山の名物菓子にて一服を試みしは格別であった。 帰途ハ岐阜を終て帰名した

名古屋附近ハ 餘り見るべきケ所とてなく大山は一度出掛し事も夜食中明日の行程を相談し 瀬戸行きを予定した。何としても夏の旅行ハ難儀な者である

窯業の産地瀬戸にハ電車の便あり 名古屋から一時間餘りの道程り、ドコへ行つても電車ハ満員、瀬戸附近は山と云はず土地のすべてが陶器原料の白い土塊にて、これでは陶器原料ハ

無尽蔵、処がこの瀬戸も輸出減と燃料不足で七百からの窯業者も今は百何十かに営業中止と云ふ惨状 其上凡と全部が輸出製陶で我らの期待した窯はこの瀬戸にハ一ヶ所もなく、それ

らは美濃でなければ現存せぬとて失望此上なく、漸く陳列所にて少し斗りの古陶を見て早々名古屋に帰る

暑い折とて知人を訪ねる勇氣もなく長男孫と食事を探るのがこの行の娯である

養老行きの途 多度駅下車多度川を渉り多度神社に詣す 社は伊勢宮の規模を細くされし 神宮造りの壯嚴である 祭神ハ天津彦根の命、天日一個命の二柱を祭られ雄略天皇

の御宇創建せられしと 猶神社にハ 金銅五鈿鈴、伽羅(記)資財帳などの国宝あり 古鏡又三十面あり大半ハ藤原鏡とある

伊勢參宮所「とふとさにも清む五十鈴川」 廿五六兩日ハ休養し 紀行文ハ 神代なからの宮居なるかな 廿七日歸京す 日誌に詳

○穩田亡兄一周の茶 九月十四日夜

P 405

去る八日から十二日に渉る 伊豆旅行即ち中村氏と共に初す氏の別荘東伊豆谷川温泉に一泊釣りの名人中村氏の獲物黒鯛の馳走で 服喫茶の興に入り、翌十三日ハ西伊豆堂ヶ島行き長途自動車難行

耳庵翁自炊庵着、名古屋からの横井三王老の茶箱開き、唐津茶碗 茶杓三齋作などで又喫

茶と云ふ到る処茶攻と美食に胃痛はツノル斗り 然も猛烈な刺激に悩んだ殊に堂ヶ島は目珍し熱さで十四日迄静養歸京した

亡兄の一周忌ハ 九月廿日に當るも、水戸幸及八田君らが故人の為追善茶を當日音羽護国寺にて催すとの厚意で今夜繰り上げ美代さんの主催で行はれた。

合客ハ 縁故者 (田中親美翁、中村富次郎氏、縣次郎君、我ら夫婦に山澤亨二君)

洋間待合に大綱和尚の幅 茶訓 茂の 迎附にて露地を 茶席に入る 床にハ 故人作信楽 写花人 三種 餅出 深く

懷石 又茂の 鯛糸作り 古染附 汁 三州水羊 椀 海老シンジウウ 焼物 奥多摩鮎 根菜大盤に盛り

鳥の串刺 煮物 小羊 蓋物に そうめん掛け 八寸 山手 塩むし 青胡椒 漬物 芽胡瓜 呉須 酒器 銚子、備前徳利 外一色を添へ 外一 蓋物に 八寸 山手 塩むし 青胡椒 漬物 芽胡瓜 呉須 酒器 銚子、備前徳利

焼飯湯 秀衡 已上 小清が腕にヨリを掛け今日の仏に報ゆる為、多摩の鮎に野菜など人念に料理 焼飯湯 秀衡 已上 小清が腕にヨリを掛け今日の仏に報ゆる為、多摩の鮎に野菜など人念に料理

わらび餅を 菓子に 後席ハ 石山切 たちかへる 二云々 外一首が掛られ主人を偲ぶ情濃く 中 貫行集の かなしくもあるかな 外一首が掛られ主人を偲ぶ情濃く

筒笠 炭斗唐物手組 鉄張ぬき 香合 菊時絵 水指、南蛮 茶入、朱の柿 羽帯野雁 長角錫縁 共蓋 政斎作

茶杓亭、君作 茶碗 粉引 大振りにて美代さんの 手点にて濃茶を進められた。 床にハ お茶一巡後広間に移る

魯堂筆、孔雀明玉の大幅 鍍金の 香炉 茂ゲルト百合子の接待に水果子など和合気分の内に散会した

○讚仰院殿魯堂居士一周忌 追善於護国寺 九月廿日

P 407

夢のよふに二年は過ぎた亡兄一周年に対し山澄八田水戸幸等諸氏が故人ありし日の物数寄を偲び今日其の芳志に依り護国寺 内各茶席に於て追福茶を催される日であった。昨夜から不安であった空も朝からの雨に主催方の持出の難儀は云ふ迄も

なく、遺族共の 失望せるも幸い

に物慾が足りなきが  
面白き幅の 意味など頼む内、い、いと云ふ一行を掛け 仏像安置し  
現はれている 純翁筆 三国時代

水指 雲鶴壺 茶杓 不二庵作 不味公時代の人 茶人 伊部路 不二  
梁附ふた 共筒 以上 朝鮮將來品二 孟蘭盆をキカセ

茶碗 絵唐津にて濃茶を啜り 替つて夫人の 茶人 独衆 茶杓ハ 九段社頭の楳を用い  
お手前にて 中次 小磯將軍に若桜銘を求む

と先頃予が郷党古野中佐の辞世の歌を 猶茶碗ハ雨漏りらしく何れも朝鮮得物らしく、きの程がうか  
將軍にお願ひせるを聞かれて後々の事 老の物好

がわれ発掘物にも染むしき数々あり 君の如きお教寄者とこそ言ふべきか 一合なり 娛しあ

### ○箱根強羅白雲洞消暑の茶

八月廿日

p 403

七月中旬病ひ愉へ箱根静養中の耳庵翁より数度招かれしも時局ハ益々凄惨を極め自分亦  
胃腸に悩み其都度お辞退し七月末一度登山茶の湯にも列したが今又合客も面白き方々ゆへ  
是非奮発せよとの電話もたしがたく、朝の涼き折にと早朝出掛た。

強羅流石に涼しく 途中の汗に一ト 今日(廿)の連客ハ 井上候 田中親美翁、八代幸雄  
風呂浴して涼をとる 縣君に中村の諸氏と予

掛物ハ 津田宗及 下の寄付にハ 純翁の「庭めくれ我足もとの薄あかり 箱根山には  
消息 うしろの山に月やいてけむ」この上もない幅

料理ハ 岐阜郡上の 焼物 鮎塩焼 茄子のから揚 香の物と云ふ季節向きの料理にて  
鮎の甘す 豆腐 菓子わらび餅

さて動坐ハ上の茶席 床に 山蛾と云ふ 花野いちご 茶人 普齋狂歌園 茶杓 宗旦作 梅鉢  
古瓢に 小東 茶碗 梅鉢

水指 古備前 高麗梅鉢ハ最近入手のよし 但し形大きく、メリない品  
と云ふ山間にふさはしき道具組にて苦茶巡服した。

風炉 雲華 探幽下絵猿地紋にて 場所柄申し分なく、あり広間にて 予が病中見舞に病院に持参せる  
釜ハ 先づ大成功で を強奪されし宗達常夏ノ段

即ち瀧氏五十四幅の内 予として餘り気持良くはなかつたが 井上候や親美翁ハ其の意外さに驚き  
を掛られしには 且つ喜ばれ主人の得意万丈であった。

猶夕刻 名古屋松浦ハ勝齋主来社、為同行の山王老らと共に予ハ亦女引留られ、予定の名古屋  
行切符も用意してあり夜に入り山を降り帰京した。

### ○伊勢美濃路一週間の旅行

八月廿二日

p 404

去年名古屋転勤の長男から 大分落ち着いた是非一同お出掛なさい、お叔さんも亡くなられ心淋からんと進められて  
いるのを幸ひ、時局柄之れと云ふ製作もないまま彼らの生活振りや孫らにもいいたい老境  
の気持に、朝の燕で東京を出発、車内も二等大座席もあり至極楽に名古屋駅着駅頭にハ誠一が出迎いで萬事は好都合であつ  
た。大戦來の名古屋ハ急劇に工業地と化し駅頭の混雑は東京に劣らず、満員市電を一直線に竟王山下彼れの住いに着いた

場所ハ閑静交通も弁理で洋間もあり部屋ハ三間廊下附庭もある 彼らにハ分に過る程で  
ある。久し振りとて一家も満足に迎へて風呂も沸いおり車中の汗を流し其の生活振りに  
安堵もされた。

夜ハ長男も呑る口とて一杯傾け車中の疲れを休めた。

翌廿三日ハ日曜でもあり 長男と共に、参宮を思い立ち 東京から携へし茶箱を路伴に 伊勢宮参拜は二人共始めて  
大戦中とてこの暑さにも武運長久子弟の無事を祈る参詣者ハ

五十鈴神橋当り目立ちて多く清流より仰ぐ神秘的な山々神ます宮居とこそ仰  
がれる。神前古の樹林も初々しく礼拝し外宮を話し、二見など見物した。

昔はしらすに 今の二見ハ遊覽地として俗化し我々の趣致にハ何の関心を得ず往時西行上人一見にありしと聞如何なる場所  
に住いしかあれ程の歌人の胸に湧出し名歌をよみには其頃の風致が偲はる丈である。名古屋からでも一日を

要する此の行程 残暑烈さに帰途を急ぎ夕暮名古屋に帰る。廿四日ハ中配に東郷時代よりの知己海東社長や鈴木副  
社長及び阿部飯泉氏らに挨拶に出掛け、其のまま美濃養老の瀧見物に 古來有名な養老迄ハ駅より相当急坂を登る

それ丈美濃平野を一望し遠く木曾の山々さへ視野に納むる雄大さはある 瀧は思いの外  
大きくもなく夏とて登山者の瀧に浴すあり。ここにも遊覽気分漲る。山道の茶店にて茶箱を



初夏の好晴風はあれどすがすがしき好日  
藤原さんからお茶の前二数日より慶応病院入院  
中の耳庵翁を見舞い、看護中の夫人と共に白金今里

暁雲庵に向く。清められた横露地を  
待合に通る  
田中親美 栗田 縣 六人

寄附上げ床に 鈍翁筆「小鳥とも笑へははらへ耳も目も 如心齋の意に 鈍翁」人を喰ったよふにて  
木兎に 世のうきことを聞かぬみみつく ならふ 世俗脱去も面白く

よせ鶴 時絵 御室焼二 薩摩の波出 振出 染 唐物長盆上に仕組まれ  
小俣箱 銀瓶

眞盆火 火 敷物 縫取等清よらかな構の内 お主人迎い附に順次露地へ  
メキ焼 シコ焼 新緑の庭園本主塔の登ゆる当り入賜

は塔の尖端にかがやき梢へを伝ふ涼風鬱蒼たる大樹を通して。市街稀なる仙境味がある

田中翁を先達に三疊小間に通ると

床に 備前 花紫鉄仙 五海産 宗全 風、大雲、と云ふ備へつけ  
花入 サビタあじさいに似たる 炉釜 龍

お主人お挨拶は 向 黒鯛皮付 祥瑞 汁 三州みそ 椀 海老シンジウ  
いつものよふ頼げに 三ハイ 器 菊形 鶴菜 切豆腐

焼物 真 器 染、 三足 強魚 器 唐津 進め魚、グシコ 絵志野へ 焼鳥 青磁小皿  
鯉 附 小芋 手鉢 烏ド 青磁小皿

八寸 生貝 湯吸物 香物 胡瓜 酒器赤絵フタ銚子 杯金欄手刻三鳥  
百合 青梅 澤庵 高取香鉢 粉引の徳利

已上のよふな 美味珍香器物は何れも名品揃い、染附変形に詩入桃に狼の絵など誠に珍品にて  
粉引徳利もお自慢品杯等にも真に真たる見事な物 流石お大家とこそ思はる。

お菓子ハ 越後屋制 を頂き中立ハ 腰 引入れの銅羅ハ 強く低くお玉割腕におぼへの名打鉦ハ  
布きん紋り 掛二 園内至る木の間に響く夜の森に消へ行く余音を述に

再入席 床に 一行 澤庵老叟 を拝す 客を囚らさぬお主人振り八千軍萬馬の実業界大  
立物お茶に対してハ少しも権勢ふりなく誠

にしとやかな好々爺振りハ流石世俗鍛錬からでもあらん お炭にハ香合、金馬の名物 炭斗藤組  
火箸古鉄

鈎捻 象眼入 釜敷 金馬ハ誠に目珍しく、先年或る売立会に出たとキ予ハ松永さんに  
七宝組にて香合 進めしも見逃されし逸品 今日お当家にて拝見し一入珍器なる

を新に感じた。水指南蓋 茶入、正意作 茶杓、不味公作 茶碗、蕎麦、銘  
銘尾花 銘あやめ 茶碗、五月雨

時恰も国事多端の折殊に翁亦台閣に出慮の噂さへある際、連会を続け都下の茶客を招き忙

中閑の清宴を催され、宝倉を開き名器に佳肴を呈せられる餘、祐、紳々たる、斯くありてこそ

大事業も達成せられるこそ惚はれ御手練のお濃茶を頂きながら翁の風格豊なる敬慕し

ながら時局の成行き美術談に歓話の後松永夫人が病院よりの急電に中坐されし為予亦夫人

と共に病院に同行した為残念ながらお広間拝見の出来ざりしを遺憾に思ふ。然し後日田中

村お両氏よりの話にハ同家お秘蔵の門、無閑筆、鹿乗、元秋元家蔵にて 去る四月 十四日

山田瓢庵にての松平家、門、無閑、幅外一幅と共に 門無閑、優物である事を聞かれた 猶時絵沈箱などありしよし

### ○横井夜雨老の夜会 六月十五日

朝鮮渡航中の夜雨老より二三日前帰国した 朝鮮得物で一服上げたいと娘しい呼び出し  
夕刻から出掛ると

巴町の金條君と云ふ茶にハ縁遠い知己に 松平不味公夫人 「昔し思ふ草の庵の夜の雨に」  
丸ビル和光老あり 階上にて新將來品 玉眠女史の 泪なそへそ山ほときす

が掛っている 鍍金水瓶二 を挿し 朝鮮朱 管耳 と云ふ具台の備へにて  
小間に移ると 白菊一輪 折々タミ、卓上三土風炉に 荒釜

食事を進めらる。 冷ウド、ハ、摺生が 茄子インギン、ハ、味噌 朝鮮みそ、二 茄子の揚物 飯ハウ  
薬味 胡摩あへ 添へ 鯛のキモ煮

どんんと云ふ珍料理。時節柄我々にとり何よりの振舞ハ夜雨老こそ真の佳茶人とも言へよふ

中立 鈍翁筆 「茶碗ほしく、なしの拙翁 不味公」 「不味公にして如斯きハ昔より  
床に にて やうやう都合手に入れ候後二服上げ度持人候」 写 銭なき者がよく買ふと言ふ教訓か

まことによく 鈍翁 「この句は昔不味公より声舟と云人に宛られし消息を鈍翁追句され夜雨老に送  
買たがると見ゆ られし面白き文にて片や十五万石の大名片や明治大正の大実業とて茶人の面目

お懐石ハ 向器ハ藍絵金襴手 汁 地味そ 椀 御殿産 焼物 同鱈 赤絵金入大鉢二

進め魚 青磁小鉢 お湯香の物 古漬 唐津香鉢 酒器染附風形 菓子 虎屋製 等にて

いつも替らぬ季節のお献立に食器の見事さ 好くも故翁が多く蒐集せられし事かと 宝蔵の豊さは他に稀である

中立後再入すると花入 白寂二 山うつぎ 花入 銘 面白く今迄拝見せざりしは、蔵

水指 備前 茶入 利休小棗 袋 鋳先雨龍 片身替り 茶杓 遠州作 銘 藤花

「むらとよのあすをうたらぬ 箱宗中 茶碗 刷毛目 有賀家 旧 茶松の花 已上にてお濃茶を頂く。お取

茶道ならずばと老の幽玄にしたる。広間に移ると床に 松花堂筆 江月讀 「緑羅黄雀、雲々飛因」

「讚に曰ク 禿帚茶葉婆娑 無明掃 全 祖瑛」 表袋印金白地牡丹 一文紫地印金 以上寒山

「拾得ノ 白清寺裏放 痴折得巴日要写詩是豊干 流石著名のお幅 顔面濃淡墨にて強く頭髪ハ

鋭く程強く名画の名に 続て 時代詩絵 香合をも拝見眼満お厚意を深く謝し 五時過辞去

○井の頭野水庵の催 五月廿三日昼

好晴の今日新緑ヲ郊外に親むも戦勝気分でなく一日の静閑を製作の資にもと招れしまま

帝都線を井之頭に着くと駅迄道案内に水戸幸主人の出迎に恐縮した。水郷とも言ふべき井の

頭公園にハ好天に浮き立つ遊行者アフレゲール軽舟を竿さし嘻々と戯れ時局何物と云ふ風

景。野水庵迄ハカナリの道程、市街を離れるこの辺ハ流石に長閑殊に野水庵は東に玉川上水

の土堤に囲まれ赤松の林立せる好地位丈一入静寂感がある

孟宗竹林をへだてし草門を入ると二千坪に餘る園内に入る 部屋に上らず庭に臨時設られし腰掛

松永翁 田中翁 松永夫人 千代さん 栗田老に予 この腰掛にて即ち野立らしく食事ハ蒸し若豆 汁三州味噌

焼物 真と云ふ 腰掛には過ぎた献立、其上天婦羅と云ふ青空を仰ぎ新鮮空気に

待てぬ親美翁ハ評判の暴食家、美味の苦小清の腕、食料不足に悩むこの頃少しは遠慮とハラハラ

食事が終り 植込の庭を去る落成したと云ふ三畳小間へ 風致を添へる床に 利休の 今日のお客はお酒少々

土風炉に 芦屋釜 香合 鎌倉彫 水指 紹陽 茶入 藤次郎 茶杓 宗旦作共筒 覚々斎 替

茶碗 粉引 銘富士 利休の狂歌には 痛棒を喰つた有様 道具組も重々しき取合に野立食事に

お濃茶ハ 過食の迹として一入結構に頂き 命らる 床に伊豫切 大籠花人に 鉄仙花白 と云ふ飾り付にて 茶

を連れられ木の香新しき新築ハ資材不足の折 ばかり ばかり お主人一家の持成を謝し日長の春の日に予定に

訪ふ為他の一連と別れ玉川上水土堤を徒歩に老を訪ふ。此行程約一里余、老ハ畑の耕作中我らの行を喜び

野歌に出て帰京したのは九時半 庭園家 丸圃老も自庭には何の構作なく雑然たるは多少期待はず

○藤原暁雲翁口切茶 六月三日夜

品にて追善会を大師会にて催す積なりしも、時局柄大師会中止の為、自邸にて催したとのお話。扱こそこの名幅及びこれからのお道具等容易からずと一同深き期待と共に部屋飾に目をうすす<sup>マユ</sup>と

釜 芦屋敷 鉢附獅子 炬縁 から木 光塵 清嚴和尚 所持 高桐院什 香合交趾狸 炭斗 菜籠

火箸皮巻 釜敷紙 鉢ムク 灰器 南はん 普賢所持 一字 お炭あり懐石 向生海苔 鯛昆布 金襴手 羽鶴三枚

汁 三州 椀 鶉叩き 花野菜 焼物 興津鯛 器 安南 見込 麒麟絵 器 小鏡子 杯 青磁八角

進魚 コノ萩 湯吸物 八寸 松露、空豆 漬物 カラシ菜 曆手壺 酒器小鏡子 杯 黄瀬戸丸 緋 巻葉型 水前寺ノリ

菓子 栗もち 已上 食器の見事なるのみか 珍味佳肴の献立に 且つ飽食して中立 主人のお手腕振りに驚嘆 染附フタ物 戦時態勢中にも

銅羅にて引入れ床にハ 古伊賀 花 白椿 山イチゴ 水指 木地 茶人 名 唐物肩衝 玉手箱 銘伊木

東山御物秀吉伝来 四方盆鉢 伊木清兵衛軍功により賜り伊木肩衝ト称ス

茶筒 村田一齋作 主人ハ 茶碗一枚重て 建水ハンネテ 替青井戸 以上にて濃茶を拝服す

茶碗は釉薬色調よく腰に指違あり大振にシテ 名物の資格重方、口茶切れの処に底に掛け大疵アリ 又 青井戸 凡半ハ以上青味を帯び澤上品 茶人袋ハ 雨籠 茶碗 ハナル名碗 茶人 公好桐時絵 中次

続いて淡茶 水指 朝鮮 手 茶杓 不味公 歌銘 いまにそあれ我もむかしはおとこ山 茶人 公好桐時絵 附 唐津 さかゆくときもありしものを

茶碗 一入 唐 干菓子 紅白 器物の何れも名品揃い花生躰ハニクランキ程の出来なるも、唐物名物茶 入を使ふ場合如何な物か、他ハ茶碗など雲州茶玉器等に、一入又良い

出来にて、前茶碗に劣なす一人には目珍き名作であった。 直亮伯追福のみか 斯界再出陳にも大なる旗揚 主人が良く器物選定の上如斯基雅宴を催され

広間に移ると床に 澤庵明歴々 江月露堂々 兩和尚 一行 箱遠州 この幅ハ松花堂より、澤庵江月 箱遠州に依頼した有名な幅

今越後 中野家蔵 花入 古伊賀 花小杜丹 お幅と云い花入共一ツハ名物一ツハ 露堂々 上出来 釉薬の流れ型共

次に部屋に列られし容器箱ハ 不味公の潔癖性格に見事に箱を改め自ら箱書されあり 見るからに心持よく世に不味箱と賞するもつべなりと云ふべし 妻女の進られる番茶果物に おれきれきの比評 正客次客の外 の内散会した

### ○小田原掃雲台為楽庵の茶 五月十二日

P 397

我軍は戦勝に次ぐ敢闘で陸はマレ、海は、珊瑚海の大勝を伝へ国民は我軍の萬歳を祝しながら それ丈国内態制は強化され、此間軍事工業面の飛躍は目ざましく民衆苦難の中にそれら事業家丈は我が世の春と揚歌し人の動きハ熾烈となり、今日小田行<sup>マユ</sup>きも車中死物狂い。こう言ふ時代にも一会を催しイラ立つ人心を慰んどのお招に松永お夫婦とも打ち合せ小田原へお客ハ常連(松永御夫婦 田中親美翁 横井山王ト予)

この頃でハ小田原駅迄のお迎ハ望まない 駅にハ一台の自動車もなく 掃雲台に向ふ 漸く赤帽の奔走で一台 少し時刻も早く

に参詣す。段々畑の蜜柑は花盛り香薫を味いながら田舎家から蝸殻庵りを逍遙し洋間に通る 合客の方々と落ち合い庭伝い待合腰掛に、新緑酣な季節園内の風致ハ以前に更らぬ幽邃

さ、侘びた杉皮壁に 「千世経へき龜の尾山のむかいなる 大工用墨壺に 尚信山水絵を切込み かねのひびきはいつもつきせし 筆を添へ

唐紙用紙二 汲出 交趾小壺と云ふ侘な 貞子夫人のお迎附 床に「道風筆 なつよをかたせませす」 銅布袋帖鎮 振出 八幡切 ほとときす云々

表装 中白地 浅黄菱文 一文字 紺地 この切ハ現在益田家に裏紙書一枚の外 古金らん 上下 雨籠 宝金襴 前田家、三井家に各一枚つある外 他になき物と

釜 天猫富士形 石炉 香合祥瑞立 炭斗 藤 組 火箸皮巻 御殿山時代 予作 緑ハ長閑堂旧蔵

碗ス、ツボン、京都の特製、揚物、若筍、強魚、芋、棧、筍、八寸、伊勢海老、草薨

菓子又、京都名菓、お給仕ハ將軍自ら終始の接待、お料理ハ何れも京都風として主客からのお尋に主人ハ、実は長谷川君が贈入れて、全部京都から持参し同妻女のお料理との事にて其のお心入れに一同感激

した。此間夫人及長谷川夫妻の斡旋は心ゆく迄行き届き、京料理の粋を賞味せるは、時節柄望外であった。

食後露地より小間に動坐すると床に「直透萬重閣」が懸り、戦後前途幾難閣を

香合、交趾、膳所写、皆具を長板、釜、姥口蔽、茶人、ハシネウ写、茶杓、氏郷銘

茶碗、熊川、替、光悦赤、二碗、さて將軍ハ一度出せられしが私は茶の点前は初めて故一寸の間稽古をさ

お存あるまいと一同お乞と待つ内、漸く肥満堂々たる体軀を茶道口より入席された、其の態度ハお給仕中に見られぬ厳然たる風格、自然に備はる一糸乱れぬ見事さに、固唾を吞で見てあるに、意外にも、何のクツタクなきお手前振りサラサラとお濃茶を練られしにハ、これがお初と信じた正客及天青らの挨拶は、一敗地にまびれし米英軍のそれにも増したるヒガ事と、予ハ信じた

それは寸間中の稽古位いで斯くあざやかに行へるべき物でなく、要ハ多端な公務の為の来訪者への要談に客をあざむく策略であつた事と思わる。殊にお手前ハ長板板披ひと云ふ厳格式を然も何のこだわりなくスバラシさは智略縦横と云ふべき驚嘆の外なかつた。

さてお濃茶も終りお淡を頂き元の広間に移り夫人初め長谷川お夫妻と共に

床に、木島、筆、の国威宣揚の提灯行列の幅が懸られあり、流石大茶人を自任される耳庵翁も、被谷、お主人將軍のお手前と云い、お趣向にハ降伏の外なく白旗を掲げられた。

猶將軍のお話では、料理は元より道具萬盤長谷川君持出しにて、我輩ハ無一物との事であつたが、信すべき事でもなく、若し一部事実とすれば此戦事中ただ一会の為斯く迄のお心入れにハ萬謝の外なく、お正客に対する將軍お夫婦の歓待に我ら迄其の光栄に接した事の仕合も又無限である、此の陰にハ、夜雨老又然り

扱予ハ正客初め、退散後一人迹に残り、兼て日米緒戦、真珠湾にて玉碎したる郷里出身古野少佐、を記念する為、武人らしき茶杓一本をけつりしを、この期会に中佐の辞世の歌

を將軍に書き入れを求る為持参したので、懇請すると早速御快諾、筒に若、と箱に辞世

箱二「君の為何か惜まん若桜散りておしまん命なりせば」

の歌を認められしは今宵のお茶と共に此上なき好記念であつた、厚くお礼を述べ十時過帰宅

### ○信濃町瓢庵の茶 四月十四日正午

山田憲太郎氏は父君保太郎翁の迹を嗣ぎ茶道具商として、三十幾才の壮年ながら覇氣あり其の活躍の度過ぎ一時

翼をひそめしが最近亦松平家の庇護により雄飛せられここ数日の連会中相伴のお招きに

信濃町本邸に向向く。合客ハ、松永翁、田中親美翁、瀬津君、季節ハ桜花爛満たる、中村好古氏ニ予の五名、花吹雪に晴れ空

玄関より寄附小間にハ、不味公「世の中はまめで四角でやわらかく、とをふのよふにあきらめませす」と豆腐の画讃、不味公好飄逸良益二、主人の迎い付に、露地を広間へ、床に門無閑、布袋讚、照、何、日照茶、拜手、と云ふ見事な物、大燈丹地、上下、白地二重、一文子、紺地ナベ銭、と云ふ見事な物、表装、小牡丹、大牡丹、金襴

扱門無閑布袋の図様を見るに亡兄旧蔵澤庵筆布袋と筆致は違ふが、其構図の斯も同よふである事、或ハ和尚此の図により模写したる物ならんと想像せるに、山田主人の話に依れば讚の点字ハ澤庵和尚トある。さてこそ想像にたがわぬ澤庵布袋ハ現松永翁蔵トなつてゐる。猶ここの幅ハ有名な松平直亮伯藏品から、主人ハ改め実ハ、直亮伯逝去前より恩顧を受し為伯藏



清、和尙  
一行「心隨萬境轉」、袋棚に金襴手仙蓋瓶、花入、花八白牡丹、遠州好景畫冊二  
水指、染附、一閑人の優物

上に、祥瑞雀の香合、床内に唐物六足香炉、定林作釜、地文柳に板、時絵と云ふ豪華茶縁高台寺、な飾り付に目を見張る

この美化した、奥さんのお懐石ハ、向貝柱器、古九谷汁三洲、梶角大切豆腐焼物一塩、葛あん掛生が焼物一塩

強魚、海老芋御本、八寸エビ、クルミ香の物、みそ漬器、純阿湯取物酒器、徳利九谷杯、染附トシホ

青磁などお心入にも、大樋君に九谷焼を用られ、中にも八寸に用いられし初代大樋皿など、作者に取り此上なき思い対する、やりハ大樋君のみか列席の我々迄にも感謝にたえず猶お粗末

処か大振舞に感激せざるを得ない、お菓子ハお秋の美味さお炭ハ、香口雀炭、炭貝白サビ藤組、羽根大鳥、敷ハ紙

茶入、破風窯茶杓、一尾伊織作筒に、「八十才作、伊織とある」、刷毛、刷毛、鳥、小服替、旦、入、写

建水、砂張蓋置、青磁磁、已上にてお淡ヲ洋服した、刷毛目編傘ハ疵はるが目珍しい名碗、刷毛も立ち、只物ならぬとお主人の説明を聞に、菊止示

主人旧蔵にて刷毛目編傘、二個の内と云ふ其の一ツトの事、世上伝へられている、との話に正客初め驚いて改め拝見と云ふ有様、突止千万、旦入寒月を用いられしは、後の空中に対する前奏である

折柄、折柄山楓も、寒月お持出し、月ハ内側を振り、同よふな袖がある、底に七ヶ所程、不規律にて來看、下高台上にも、高台ハ、敷丸ミナシ

高台内、トキンは、思い切り深く探られている、大樋君はこの茶碗を別室に持込み、荒作り素土に模作を試む、作者として実物を前に写す

する至難なる彼れの心境に同情するが、写すハ其の気分のみにて、之を写す、場台其の成功ハハケ敷く作者としての予ハ特に其の感を深く感じた、猶この間

同家愛蔵の、ハ、ハ、コウ、作、銘山窓、藤田家旧蔵を拝見した、この茶碗ハ、腰ハ丸く、殊に赤味袖あり、其の自然釉葉の色

技巧的作意、予ハ、此の道人作に、魅力を感じた、高台内、金、印、猶、寒月ハ元が加賀亀田、是庵所持戸田露吟より、当家にハ大坂佐野家の旧蔵を納めしと

箱ハ、一閑ウルミ塗、「山のはを登れどもこえは埋れきて、と朱書アリ、雪にかくむく有明の月

外箱、「純翁筆、親友塩原ぬしより、ゆくりなく茶を賜り、二ツ入、「て見れば昔逃せし寒月なりしとぞ、昭和甲戌春純翁」

塩原さんは、東都一流数寄者中唯一の寂茶人にて、名器多数蒐集しながら、侘茶に終始し雅客に賞揚されている、高貴な品のみを本意とする近世茶家にハ目珍しき存在、従て我々にハ此上なき仕合である

乍序天青老が物識り顔に、染附杯を和蘭陀と説へ青磁写しを圃物揚刻名杯など正客に披露し或ハ

稚氣にひとしき駄洒落にハ齒の浮く思い、之れが茶道雑誌の主幹、初心の人をまよわす甚しきかな

〇小磯將軍新堀之茶、三月廿二日、P 393

国を賭しての日米戦ノ政策に軍務に活躍中の小磯國昭將軍が、寸閑をさき金を掛

けるから相伴せよと案内を得たので主人には、て、武將のお手前拝見するのは、元龜天正期の、戦乱期に

豊織及び其の旗下の陣中茶の湯にも比する感もされ喜んで参入した。

芝ハ新堀奥まりし住い、門前にハ茶会の夕べにも拘らず軍の最高幹部丈訪問者の、げく玄

関に通ると書生君の案内にて洋間に通る。

今日の相客は、松永耳庵翁の外山下龜三郎翁、山下氏急用出来不参の、横井夜雨君に予と云ふ事であったが、、為栗田天青の四君

間もなく京都西陣の機業家長谷川某氏が今日の茶の為特に上京水屋勤役として刺を交換した。

京都からの援兵には少々恐縮した。

廊下から露地へ降ると軒先に紅梅一本弦月下に咲きほこり、地上三三輪落ち散るも風情を

添へている。入席する離れの広間にハ

床に許、六筆、雁の「江のくまや」は志越の一句が掛り、青太竹、薄紅椿一輪挿る

から贈られ、銘勝、と付られしと、大戦中さもあるべきか、扱懐石ハ向、鯛小切、汁、合せみそ、ヨムギ

將軍即坐、二、此花入ハこの朝夜雨君

緒のみならず名釜であった 然し茶に八方寸釜が適する物である 好参考を多謝す

○夜雨老の夜会 二月廿七日

P 389

夜雨老 近來しきりに釜を掛られ今宵又廿五日来の大雪残雪を踏んで (横山山王老、馬場和光老) 栗田大青老あり

床に宜稱筆の画 鈍讀「遠行者疎道」炭飾「袋形」 袋形 焚ハ馬具など利用に妙を得ている

階下小間に 古市播磨 歌三首 沙門「池水になかれてあへぬうき草に」 懷石 向ウド 蒸しうどん

椀雑煮、芋の 揚物 玉子入お粥等 節分前の気分の掛物 に任も籠り老の茶興ノ面白さに感服し 菓子又

そばカキ と言ふ珍味であった 茶懷石も時に応じてこそ美味食触をそぞる物、小清、 柏屋など及びもつかぬ味い此上なし。扱

小間に 動坐 床に二重切花入、 鈍翁作 歌銘花白玉、水指 朝鮮白磁 茶人 京燕 茶杓鈍翁作

茶碗 井戸風の替粉引 釜ハ名越作 以上真の茶友の娛気分であった事を感謝す。

○一日遅れ桃の節句茶 前田老 三月四日夜

P 390

日米戦ハ熾烈を極め敵の空襲は国内各地に行はれ たたならぬ事態となつた 亞米利加軍は強大な軍力に 対する我方としてハ物質の統制相次ぎ断行され

不安は日と共に加る 此頃重齋 老から一日遅ながら桃の節句、気分て多少暖いのを刻から下町に、合客は遠藤老外未知二人

椅子間で 香照を 階上に備前花人に 白桃二も節句 気分妹嬢のお炭手前 置炉に懸け 香白始と云ふ組合

懷石 向ウド、生椎茸 鯛の切身 汁 三洲みそ 焼白、菱餅、菜の花と云ふ有様 焼物 菜山産 岐阜の川鍋 から湯

強魚 南瓜、生椎茸、八寸 胡瓜、グンシ子 香の物 スケ、甘酒等々 此の物質不足の折、かくも珍魚美肴の大盤振舞

この振舞も愛嬢の茶趣味に老の慈愛がこもり、奥懐しき限りである。懷石中突然燈火管制発令

一時消火騒ぎもあつたが、日頃の訓練に神速かつ落着いた統制が行れた。こんな訳でお茶巡服後

十一時と云ふに辞去

月は満都を照す 敵の空襲には絶好など考え帰宅した。

○禾日庵空中寒月茶碗の茶 三月八日正午

P 391

奥さんから電話で突然ながら少し早目にお出掛ありたし一服差し上げたいと毎度のお芳志

におく面なく出掛る。玄関を右に露地伝い洋間に通る 朝からの強風にも落葉一ツなき庭の掃除である。 大火鉢に暖は三月初めのうら寒さも心入れに

先着の予ハ今日の連客が誰れならんと待つ内、お主人出坐あり 今日ハ時節柄何のおかま


いは出来ぬが松永さんの紹介で加賀の大極長左右門君が所蔵空中寒月茶碗を横写が願いた

いとこの事でこれを幸ひ貴所にも同席を乞ふたとの事で其の光栄を謝した

間もなく丸岡耕庵翁が大極君と共に到着し今様雲寺をおとづれしにお出掛け迹とて大

極君を紹介された。結て耳庵翁栗田老も参入した。お主人の案内で庭伝い禾日庵へ

広間床にハ

茶人 古瀬戸 銘呼子鳥  茶杓 小堀宗実作 「これやこの心ある人のあかむべき箱ハ蓬雪」

茶碗 雲鶴 銘雛鶴 老一流の面白き取り合せに茶の興致を活されてあり、茶杓ハ目珍しき人の作である。茶麗雲鶴ハ主人朝鮮での得物にて発掘ながら、良い茶碗将来必ず立派に愛玩される物と信ずる。

客一云のこの茶こそ真の雅会であつた。夜雨老の近來の催し中今宵程 娛しき且つ道具にも名物ならずとも面白し組合せであり主客歡談辞去

### ○目白猪鍋の会 一月廿一日夜

P 388

松永さんから猪が到来 猪なべに二服と案内を受けたが、夜の外出は此頃の寒さ、折角ながらとお断せるも社からの帰途お自身のお迎に同車 目白に出かく。

洋間を見ると 驚くべし雪舟筆着色 裝飾構図ながら其の筆の妙驚くばかり落款なく等揚の印丈

主人のお咄では、前田家に之れと凡同よふな屏風あるが、此分はいまだ公開されし事なきと、凡眼にも名画と感賞した余ハお買入れを進言した。間も縣君も来り之れを見と予と同感であつた

猪料理ハ久し振り、大寒中の猪ハ亦格別三人鼎坐鍋をツツキ飽食した。何と云ふても寒中ハ鍋に限る

食事が終り書院で立茶

茶箱にて この茶箱ハ材ハ椴にて胸張り全面に七宝紋の浮地刻に丸紋花鳥動物の揚刻アリ其の精巧は驚く物あり予ハ如泥の作と鑑定した。内部ハ大平目地底裏にも菊の流れ水の刻等至り尽した作

迹にて聞けば雲州家より出た物と、扱ハ推定通り不味公が夫人玉暎女史の為如泥に命じられし物なんと。

茶人唐物青貝七宝 茶碗祥瑞筒 半面詩文 半面芙蓉花に尾長鳥と云ふ名碗が仕込れ夫人

用として見事な茶箱 已上にてお淡を頂き最後に光悦の小巻下絵宗達筆金銀泥絵リンド一芒、椰子蝶など冊六人集用紙風の台紙見事にて光悦歌三首詩三と朗詠風に特意の墨筆を振り巻尾に印さ

えある名巻を賞訖し辞退す 家外目白台の寒さに六日月の弦月肌を射す思に十一時帰庵した。

### ○根津家特別展参観 二月廿六日

P 389

根津家の特別展に 参会者ハ 井上侯、後藤慶太、小林一三、穴水、早川 耳庵翁に誘れて 萩野博士 田中 外三の

床大燈 国師墨跡 横 九行 奥書二元亨壬戌宗峰叟如題 書院伊賀花入銘寿老 雲州家旧蔵 底ニ刻アリ

水指 土京附桶 肩 松に菊花地紋 第二席十六羅漢 因陀羅布袋 讀楚石 雲鶴絵 横

讀に曰ク 花樹閣相姿過喚作慈 尊又是魔背上、忽然拙出眼幾 驚致將摩妙 〇啓書記筆 一十二因縁長巻 真山水小点 鎌倉期 經の書入アル

法隆寺 一切經 書院 名物春日山扇箱 一外部螺鈿丸錫縁 香合 扇面中に 月を嵌入八ツ橋香合ト云ふ 無地扇面散し

砧青磁竹之節花入 茶碗 井戸 同ク信楽 銘水の子 筒形高台高く六角 無雜作の作行腰にコゲアリ



外二釜二個 得月 雪村筆 半面に方の二文字アリ 古芦屋、前後に文字アリ 永正丁丑施土普屋宣屋大工

片側二奉寄進 西坊 高野山宝幢院 公用

已上拝見ハ仕合せ 因陀羅ハ予にハ識見なきか感心出来ス 啓書記ハ構図筆致等良い物ト思ふ 香合ハ当時の仕込物ト見受けた。時代丈の品、青磁花入水指など優品云ふ迄もなく

茶碗忘水ハ名物丈に小振ながら、ヲカスべからぬ名品、伊賀花入ハ釉葉掛りハ良いが型の弱 物 時絵硯箱ハ何の為の名品か、昔の数寄者の不認識に驚く外ハない 釜は流石ニツ共由

菓子ハツケ焼 を妻女に頼み これが又塙所柄に うまく 茶はこう言事こそ娘しく我々佳茶  
越後かし以上 人丈の法悦である。

茶箱と言ふ物も面白く殊に旅行など茶家にとり何よりの好呂伴（マツ）であるが武骨者に持る茶箱は稀な者にテ、この茶箱は瓢を用い寂びもあり携帯に弁理（マツ）で耳庵にも適した物である。

扱帰路についたが 向い風にも向られぬ烈風吹傾れまじき猛列の難行ノ一里を漸く帰望した。留主中細野  
老来遊次いで柏齋老来り自炊庵満員 所が電工の一人が山鳥を射留子持来り、思はぬ夜  
食の馳走にあり付き、例によ  
りお茶は柏齋の手で一服した。

風強けれど空は晴れ月は煌々と老松を透し漁村の夕餉に登る烟も島らしく、新正月とて鄙にも何となく新しきを祝ふケ配も長閑である。

予は明日の帰京の為月下に狂ふ怒濤の音を聞きながら、早く床につく

予の早立に細野丸岡も同行するとバスの乗車券を電工に頼まれしが予約満員で買はず、予丈ハ幸い松崎から谷口君の厚意で輩下の一人が停留迄乗車してくれたので座席もあり耳庵から明日近衛公来遊ゆへ是非と引留められしを権門方にハ関係なき身として翁一家の見送りの内に島を出発した。土肥の乗替も連絡のあった物が出張員が座席を取ってくれ、苦もなく乗替へ途中無事夜の八時帰京した。堂ヶ島八時半発此間十一時間を要する行程にハ、こん後此の時局再遊は望めないかとの行思い出深い気持である

### ○前田南斎老の招茶 一月八日

P 386

前田老も近頃二人の子息を 戦線に送り娘さんの茶趣味から時折茶を懸け清遊されるよふ  
にて今日亦二時頃からお越との事でお掛た。

相客は知友、**閑野**、**聖雲**、**君只** 一人 妹娘さんのお給仕で鯛の刺身お正月とて屠蘇を祝れ、伊達巻から鳥のグシ  
焼き雑煮と云ふ、一寸得られぬ馳走に聖雲君の酒豪と主人も呑る口、ツイ

進られるまま、好い気持に正月気分となった。最後ハ下町高級な寿司も出ると云ふ振舞、扱お茶ハ姉さんのお手前、置処に棚飾り、お道具ハ略すが茶碗ハノンコウ黒、了入箱であった

### ○琴平町独客茶 一月九日

P 387

夜雨老から二三日前 より来遊を進められしも、伊豆行の疲に遠慮していたが今朝又も  
鴨瓶に行き三羽獲物あり 是非との事で夕刻から出かく。

階上洋間に ホウツキ 主人自筆の 提灯 行列の画二翁 「あたまる年の始の勝軍  
いく世の春のおもい出にせむ」 と 戦勝と新春を祝  
せるも面白く

間もなく主人出坐 互に新春と戦勝を祝し  
掛物に対する老の 餘技を賞し 純翁歌と共に将来名物たるべきを  
たたへ、伊豆行など物語り階下小間に

床へハ 三条西、 卿の短冊 梅迎 客と題し 「いつのまにほふか人をまつせらん」 誠に適幅である。実隆卿ハ 室町頃の大歌人

釜 富士 炭取 瓢阿作、羽箒野雁 香合 高麗 柴蓋にて炭手前ある  
老らしき好み

広間にて食 八代六郎將軍の文、ハ、 広瀬中佐 旅順戦死に  
ついで云々 往年中佐の奮死を おもわす物あり

七輪持ち出し鴨鍋水焚 大徳寺納豆  
汁あさり 以上至極 簡単に見えるが寒さの折として 鴨鍋の甘味さに酒杯を重ね陶然

として元の 鈍翁作 床にハ 銘相、南 箱蓋裏に 「一竿生相南半枯幾星霜  
如今得歸処長簪滿頭花」

詩にもある通り半面枯たる 侘びたる竹にて殊に鈍翁の詩ハ稀れであり、夜雨老よくこの尺八  
を捲き揚げられしものと、その腕の凄さに敬服す

水指 会華 の狂歌 「主人にはかの壺してと  
愚痴をいひ」 などと



会華にハ目珍しき型  
この水指ハ箱にも鈍翁



○熱海小雨荘より伊豆堂ヶ島脚行<sup>(2)</sup>

昭和十七年一月二日

p 384

去年十二月八日 大東亜戦勃発後最初の 西南洋上の戦果は 快勝に次ぐ善勝な丈戦域の拡大と共に 新年を迎えた

迄動員 戦備補給に全力を尽すといえ共、資材を海外に依存せる我国として、敵国よりの 資材封鎖ハ資材乏劣特に食糧不足ハ極度に逼迫し国民生活に大なる不安は刻々に迫りつつある

如斯際旅行でもあるまいが例年正月にハ 熱海小雨荘をトウ例もあり耳庵翁よりも堂ヶ島行きハ今年 限り不能ならんかも知れぬと誘るまま決行した。

午後三時 自宅を出発鶴見辺より雪となる。列車益々混雑熱海着ハ夕暮れ時、来訪中の熊本氏 令息や丸岡老らと食事中とて余の為に雑煮など正月料理の馳走を受け、一

風呂浴びて小間で丸岡老の 手前で 床ハ 例年 誰知春風来南 謹知春風来南 望月 丸壺 茶碗 雲鶴<sup>(2)</sup> 茶碗 筒 にて好の白を頂き明朝伊豆への早立の為間もなく寝二つく

△翌三日朝霜深く八時半一ト風呂浴し耳庵翁を 初め丸岡老 食料として米塩鰯一尾酒一升野菜 下女二人 総勢五人 茶道具一式と云ふ大行利を携へて

三島から騎豆線修善寺駅に着しが、河津川配電社員の手配も自動車なく、バスハ満員乗り切れず、迹発ハ三時間 待つと云ふ有様で、駅前裏の安宿に上り込み携帯の握飲で腹を肥すと云ふ有様、午後三時バスに漸くバスに乗れた。

三時間のバスが土肥に着いた折にハ、出張所員の尽力で直ニバスの乗れしハ仕合ハ、西海

岸のこの日ハ西風強く怒涛は岸壁をハム物凄さ。この難行も漸く堂ヶ島に安着、停留所にハ

松崎営業所から谷口電工長らが出迎え、吹き荒む島陰の自炊庵当り掃除も行き届き、高木旅

館老夫婦あり炬にも粗朶が畑っている。風呂の用心さへ出来、自分ハ先つ主人をおいて一風

呂旅塵を掃ふ

堂ヶ島ハ流石に 暖く風強けれど 自炊庵は暖く 猶ここには自炊庵や一日庵の外 中腹に 増築されてあり近い内にハ 岸壁におふわれし 新に二間続きの新居が山の 近衛も来遊されると

松林中 海に面し 道さえ 出来一段と風光を添へている。伊勢海老の刺身に空腹を満し 床に光広脚の色紙 散策 夜食にハ鰯箱に 難波江の云々を掲げ

茶人 山挽茶目 ある茶箱用 茶杓 庵主 茶碗 唐軒作 水指ハ 台所用 云ふ道具にて茶を啜る 口に時経 作 赤茶 疎庵箱

風ハあれ共窓外月光海波を輝す絶光に寝に就く のもおしく主人をウナガシ海辺を二巡して 波海耳を 打ち 我ら耕圃と共に新居にて一泊

△明れば 四日朝来空晴たるも西風強く巨壁に打よせる波涛の飛沫物凄くウナリを生しながらも不思議ナ程島陰 は静である。朝食ハ鉄鍋に味噌汁雑炊と云ふ野趣満々それが又無性に味い食事は例の通朝の服に喫

茶の興致 島の朝来空晴たるも西風強く巨壁に打よせる波涛の飛沫物凄くウナリを生しながらも不思議ナ程島陰 入に我ら又全島を二巡す。山椿は既に咲き誇り山上よりは富士の雄姿さへ望め伊豆南端の島々 望の内にあり絶景

中にも潜水艦の南航され見る 前線に航する や警備の為か戦局の前途多難なるをおぼゆ

さて明五日ハ帰京の予定から今日よりバス乗車券を求る必用上谷口君に依頼したが、ここ

からの乗車ハトテモ不可能 松崎始発場からでなければとの事であった 然し谷口君が何

とか座席を取りますと云ふので安心した。午後からは耳庵の進めで依田松崎町長所有の温

泉場行きとなり扱出立すると強風は益々烈しく歩行さへ困難 其中にも仁科当りハ近衛公

来遊とて街道警備の警官等が松永翁をとらへて打合せなどの一時間余もついやす。風は益々

猛烈となり、翁もジレ気味、之幸いと温泉場中止を進言し、苦もなく承諾された。

ドコカ弁当でも喰んど、町の中ばより猫越街道を小田部と云フ関谷に出で、元仁科町長現

県会議員佐野氏の家に飛び込む。ここは景色もよく風もさけられ妻君の好意でお湯の用意、

電工長携帯の弁当にて先つ空腹を満してホット一息、この時の塩鰯の美味は忘れられぬ程で

あった。

我らが握飯を 味ふ内耳翁ハ溪流を渡り、竹藪から青竹を伐取り、電工に命じ早速の花人が出来花ハ 白梅に山千両を掛け、緑側の古びし柱にツルシ茶箱開き。

茶箱ハ 古瓢を 藤組の なかなか面白く 茶人 茶碗 空中と称する 一寸と怪しが 茶杓翁 切り ふうた付 独茶 赤茶 自作

翁の筆跡を入れしも羨しく、時局即応のお茶を服台すること、時に取り意義あり且つ時を得たる数々の道具にて、唄しき限りであった。

### ○禾日庵に於る山楓氏の茶 十二月廿五日夜

P 379

時計王で知られる服部正次氏ハ号を山楓と呼れ塩原禾日翁の愛婿 茶道は岳父と共に式守蝸牛宗匠に学ばれ、壮年ながら名器を以て茶本来の任に徹せられ数寄家に将来を嘱望され

或は衆を抜かれると迄期待を得られている。戦下歳末多端の折にも今宵又一会を催すとの事或ハ歳暮の茶を抜下かとも考へ時刻参入すると

お相客ハ (近藤滋弥男、松永耳庵翁、岳父禾日庵翁、田中親美翁 予の五名)

いつもの通り 指定の正面玄関より、何の飾ケなく、侍女の運ぶ香煎を吸る内、山楓主人おもむろ出迎、階下応接間に通る、とあり右の袖にしのばせられし袖香炉を耳庵翁に渡されしは

今宵の正客 御指名とこそ知れける、ながら禾日庵に入席 一間板床上に、花ハ、花ハ白玉に藤の実、時代唄を釣れ、東亜戦出陣気分

釜、与次郎作、姥口共ぶた

縁、面皮附、時代、風呂先、無三羽翹、風雪暮鴉ノ題字

炭斗、生蕃籠、藤組



羽根鶴、鉄徳元作、火箸桜巻先黄銅匙

灰器、丹波



釜敷、長門、香合、一入作、赤糸、柿



右何れも佳品揃い香合の佐は流石にて難具、に至る迄斯もよくまとめられしに敬服する。

懐石ハ信玄弁当、丸膳に、を運ばれ

時刻柄粗末の食事、上段に、貝柱青菜、を差上るとお挨拶

中段、生貝、カラス身、小芋人參百合

下ハ赤飯と云ふ、お祝い、気分

お椀、餅、煮、鮎、人參、焼物、興津鯛、器ハ、鉢織部長角

春慶蓋附、進魚、ウルカ

器九谷鉢

鴨、白菜無、煮込

鉄手附、なかななかお粗末処でない馳走の上

八寸の替り

青磁に、澁刺たる、大鯛の片身

を刺身に、姿のまま、其の豪華振りにのお趣向、物質不足など吹き飛さんず有様に主客初め、覇氣満々のお主人振りに驚嘆す

お番茶に香の物、味を漬、器、古萩四方、青糸、片口

尹部の銚子

粉引写

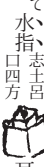
杯、梁附ハツ捻、瀬戸椿手

粗に見え美なる、配合と献立に

一同 風雲のを忘れ満服、菓子、そばを頂き敷瓦、廊下へ、山と盛られし炭火、に寒さおほへず、きびしき、中、銅羅を聞く、下羅の音は天候によって、物、今宵は雲低くたれし為か、亦ハお主人の気合よかりしか、其音響に相違のある、名銅羅は一段と幽遠感を添へた。

再入席に、光広の「ちと見参に入たく侍入候、此者とられし御席に及ぶべからず云々」末尾に「雪やこんこんあられやこんこん」とある、冬こもり、十二日、文

の大横物至極季節向として、申分なきお幅



水指、志土呂、古織の深き樋作の強さ、流石休七哲の随二丈にて申分なく、ただ

茶碗、金海、雨漏

已上、水指の志土呂窯の目珍しき姿に、宗長裏ハ一寸たり共スキなき配合の上、茶杓、古織の深き樋作の強さ、流石休七哲の随二丈にて申分なく、ただ

雨漏茶碗丈ハ、金海とあるも、寧、熊川と称する方適當ならん、窯元金海ハ熊川に近き為、同よふに見る人古来より多し

光広卿の冬こもりに歳の背を偲びつつ初昔の名茶に名碗を抱へ歳越雑煮に苦難の年を送

る今宵の振舞に老人共を向にまわし壮年のお主人が斯く迄見事な心のまま器物を善用せら

れしに對し正客方こん後如何なる報酬あらんかを娛みながら洋間に移り水果番茶を頂き

九時過ぎお暇した。屋外流石寒さ強く耳庵翁今夜十時九州旅行の為時間ある為共に草庵に

立寄られ服部主人の茶談に過され東京駅に出られた。

回数三十八回

この冊、昭和廿六年、九月、彼岸中日後一日にて書き終る

窓外秋雨瀟々冷氣虫聲をたつ日、有望



雲中庵茶会集 七

P 383

自分は、時局柄でも例年通り河豚料理ハ一度ハ必ずお催あらんとある幅を携へお土産に贈呈した  
幸い手に入れし、文登の画とある仙庄和尚の狂歌

奥書二文久丁巳初冬  
於野洲佐野庄須藤杜川丈人  
紫翠深省写とある。お主人ハ近來の得物とお自慢である。扱下之関河豚は本場  
進に随い所謂タラ河豚頂戴してい  
る内お主人ハ何が趣向でもあるか

奥書二文久丁巳初冬  
於野洲佐野庄須藤杜川丈人

紫翠深省写とある。お主人ハ近來の得物とお自慢である。扱下之関河豚は本場  
進に随い所謂タラ河豚頂戴してい  
る内お主人ハ何が趣向でもあるか

書齋でコソコソ用意をされている。食事が終ると、皆さんコチラへとのお案内に書齋兼寢室

ハ見事に整理され上敷迄敷かれてある。壁面にハ  
八見事に整理され上敷迄敷かれてある。壁面にハ  
八見事に整理され上敷迄敷かれてある。壁面にハ

懸け大衝立前筆筒上に桂かごに白玉外一種を活けてある水次応用と云ふ耳庵翁の面白く

十二月中ばに場所柄とて風炉釜が備へらる  
旭が意外にも釜ハ  
ただならぬ物らしく  
霰地紋と云ふ取合にてお独自の手振面



香合唐物無地内朱捺梅にて香茶人一閑の侘物茶杓 鈍翁と云ふ取合にてお独自の手振面

白く濃茶を練られ巡服した  
このお趣向は一面奇意でハあるが、時節柄食料の乏しき折下之関河豚など、  
日頃とて容易ならざるに、多忙な一時を親しき茶友を招き自ら部屋の整理迄

行はれて自他共に苦味の喫相さ  
真の茶人と云ふべきか。さてお茶が終るとと耳庵翁ハお覽の通り  
の粗末な道具でお茶を差したが、  
実ハ仰木君に河豚を喰したい為の余  
興であるが

餘興席に皆さんから、この道具の内お自身のお好な品を出しての要求。扱ハ鑑識試験だな

と一坐顔見合せたが  
宮島君は要領より「お主人の茶の心人」粟田老は  
止むなく思い思いに書入れ指出した開票の結果  
乾山冊子二香合 縣君ハ丸の幅 丸岡老ハ茶人と

予ハ釜に香合と記入してあつた。主人ハハ良い記念です保存して置く然し皆さんのお希望程の品  
は一点もありませんが、仰木君が釜を一位とされたに対し釜の外箱とお覽

に入れると持出された蓋ハ時代も古き黒塗にて  
書れ裏にハ松地紋 芦屋釜 松永弾正從信長釜拵とあり  
松永釜三字銀粉にて 朱書二 総蔽

一同口あんぐりの体、自分にもサ程迄ハ思はざりしも、無論天正頃の名釜とは想像せる丈由緒ある事ハ的中し  
た粟田君の如きハ仰木君ハ前以てお承知の上ならんなどトンデもない邪推であつたが、主人はこの釜ハ二

三日前手に入れた今宵初めて用いし物との釈明であつた。斯く試験台に上つたが、人各好き好きあるもの

各人が自己嗜みを発揚されし事こそ、面白き一興であつた。猶香合ハ時代も型も良く立派

一流茶人の愛する香器であつた  
永々と書立てしも戦局酣の折こんな趣味津々たる一夕の  
ツドイこそ忘れかたい為である 主翁の厚意を萬謝辞去

### ○琴平町夜雨老ノ小集<sup>(10)</sup> 十二月十九日夜

P 378

夜雨老より血生臭い世の中一夕の茶を啜るもよからんと案内で  
出掛ると丸ヒルの歌人某和光  
老人に天青老ありし氣軽な

連中主人も近來浪人の閑人として好きな  
茶でも啜る外あるまい 階上の席に通ると  
宗中の「かたさしてなしたへて行く年の  
消息 世の阿ら浪をのかれてし可那

年の暮と云い悔々たる  
洵に適幅である 猶この前文に風邪見舞の意味が書れてあり  
予又案内を受けし折風氣味にて二度 お断りした事から意味深

く感じた 炬菊地紋釜染附波出しなど丸盆広間に移ると室田禎義文翁君と我炬に手をかさす  
床に 大三十日 幻庵

一年之汗在歎寅 昭和二年 鈍翁 の三筆横物が掛り、鈍翁の除夜の書又ハ、  
最近物故されし野崎幻庵翁への追 想もゆかしく、扱嫌さんのお給仕にて

向カキ 汁おから 小皿に雲丹 小鍋松島産に伊賀上野のコンニャク 寒さの折牡蠣鍋の心入れ  
山ノ芋 七輪持出 カキ鍋 ネギなど

此上なき持成に重分 戦禍中にも、こう云ふ趣向こそ然るべきと、お主人のたしなみ深

きを敬服した さて食後お席に通ると、

床に鈍翁筆制海の二天字横物 何と云ふ米英戦に 際に 茶人古 花長春 四方盆に  
制海を扼せんとする 鈍翁 一輪

水指 朝鮮唐津 茶人反古張 鈍翁 茶杓 竹手 茶碗 黒染、萬歳文字入  
共蓋 鈍阿写 国家の為慶祝云々 半紙を 茶杓 水谷川紫山男の書

替 志野 桐の葉のくちたるが上に小夜時雨 鈍翁 庵主が文に歌にハタヌ茶に興味深く鈍翁  
銘時雨 おとなきもささしかりけり 晩年側近に待せる関係から、斯く多く





水指 古備前 種壺 茶入 、連時絵 茶杓 江雲和尚 茶碗 、駒三扇 見込花押型 にて 美代さんの濃茶が

練れて進めらる 去る七月十七日亡母命日に式守老の名香煙燻の折 耐え難き身に茶を練りし病児の姿を想起し感慨無量である。 お茶が終り

青磁竹の節花入に牡丹を活けし広間にて番茶 水果子など 紀念記帳 四時一行は帰京 予ハ迹に残り 振舞れ 今日催につき美代さんにも

厚くお礼を述べこん後の淋しい一家の幸福を祈り夜に入り帰京した。

### ○柳瀬山荘耳庵席の茶 (13) 十一月廿一日

p 372

好季節の秋色柳瀬山荘ハ今全山紅葉酣にて庵主としてハ茶友を招かざるべからぬの心境

とて、今明日と連会に招かれた 今日のお客ハ 服部正楓氏三越の桜井氏 式守蝸牛翁 横井夜雨氏 (ニ予)

席ハ燕庵写新席にて 耳庵翁 年設けられし山内中央に設けられてある。 老松大樹に囲まれし この席にて

床に 悟逸墨跡 金 古芦屋 縁 黒柿 炭斗唐物白寂 香合 独楽宝珠 横物重美 線口 時代 羽根鶴 執張員 等々 住友家旧蔵

懐石は省略し後席花入 、遠州作 花玉 、白 水指釣、茶入 、名、 宇治文琳 、松浦家 茶杓山科道甫作 、旧蔵

茶碗 志野 住吉ノ絵 大筒にて濃茶を拝服しお開きの間に 雪、筆杜子美、の名画が掛られた 魯堂旧蔵、予推薦

以上翁も今日は大奮発の墨跡も良く遠州 花入は予が 寂のある名筒 香合ハ宝琳中 群を抜く名器 推薦した

にて甲分なく た 志野茶碗丈ハ季節柄少々太過ぎた感がされた。 何れにしても時候も良く山内の 秋色にこの道具組茶に親む

物のみが味い得る幽玄な興致であり翁の物数奇ハ我々にも此上なき仕合であった。

△ 翌廿二日ハ 井上侯爵、近藤滋弥男 加藤正次博士同夫人 平松老 (予)

道具組ハ前日通り懐石丈ハ自分は連日の過食に胃腸も不満ゲであり遠慮しお茶丈ハ相伴し  
た。其の際、初めてお用いになった 無 地 呉須香合は 上部即ち 色も良く 流石に名香合にて、之れ丈

拜見したい為、特に今日の参加であった。 益田原両大家なき今日でハ 今日のお客組こそ東京数寄者の華形揃と云へよふ

### ○塩原禾日庵口切の茶 (14) 十一月廿八日夜

p 373

朝から暖い日であった。禾日庵からいつもの常連でお招を得た 風の強い日にも 午後からは 穏となり正玄

関から洋間待合に通ると

時代小風炉に霞切合釜 波出京焼 振出し織部 栗盆に 間もなく連 松永翁 親美翁 中村氏 予の四人に お主人の五名

禾日庵に入席すると向掛 金森宗和作 一重切 花 太郎庵椿 はしばみ 床内に 呂宋の 扱ハお口切と見え、近 茶壺飾 来目珍しき思いで

正客初め 意儀をたたく 間もなく お持出しの道具箱より洪紙を取り出され 此前詰茶目録を正客に示され 茶名お好を乞はる

茶名目録 御茶入 一極上内 梶の音 摘 半昔好の白、廿八日 初昔 廿九日 半吉 御詰一斤

巳六月 吉日 この目録により正客好の白を望まれ詰半斤袋 詰茶 二袋 薄茶用を取り出され挽料丈 小形の箕 に入れ

られ一応水屋に運ばれ、再び出坐元の坐にて詰葉大半を箕に擦り出し、三袋共壺に納めて後詰詰葉を以て元の通り詰込まれて後、道具箱より目張用紙をノリ道具にて元の通り目張りの式終る

壺の網袋ハ初め水屋に取り入れられしを、再度 取り入らる 之にて口切の式は終る 正客初め初見の儀式と 持出壺を網に納め、紐は結はず紐を持って水屋にて 緊張の内に拝見す

扱奥さんのお炭手前二 炭斗、瓢の新切 羽根鶴、執時代捻 火箸桑柄、釜敷 紅白、香合 物 染附辻堂、散り楓 伊達家

已上にてお懐石 膳 角切 黒四方 新物 向 甘酢 永寿写 手 金襴 汁焼百合 梔 胡摩豆腐 エビしんしよふ 焼物



ハ又因果経三行天平時代の小幅が掛られ新羅透共蓋、名香が炷込れあるなど、至り尽せるお心入三足小香炉れに一同志木を  
経帰宅した

○小田原掃雲台虫干参観記 十一月十一日

P 368

朝からの 曇天虫干観覧ハ無理だと考へたが耳庵翁から今日出掛る田中翁とも打合せあり、只昼の食事ハ小  
田原にお迷惑をかけたくないから、私が重分用意携帯との事で、少し早目に出掛けた。小田原駅にて  
福田君に送られたが、車がないので、初めて徒歩小田原城跡を見ながら掃雲台に、福田君ハ益田家ハ初  
めのよし、親美翁既に先着、土地の山田又市君等と共に待受られていた。

数日来続行された虫干の關係か、今日の風入品ハ之れが益田家蔵品かとアヤブまれる品々  
も多く唯高山寺十観抄白描十二神將大幅位いで、一寸失望した。カレコレする内故翁主治医  
近藤師も来られたが、耳庵翁の姿が見えず、其間自分は園内山上に故翁の奥津城に参詣した。  
翁逝かれし迹も蜜柑畑など、以前に変らず手人も良く行き届いている。部屋に帰ると耳庵翁  
アタフタと飛び込で来られ、延着の理由ハ急行燕に乗った為沼津迄無停車で引ッラレ、亦引  
返したとの事。翁にハコンナ失敗は毎々の事ながら、待つ方ハ腹ハ空くなり待ち遠く早速大  
包から椀飯に玉子焼ツクダ煮を開かれた。之れ又驚くべき大量、流石の田中さん父子でも喰  
い切れぬ程であった。

電業界に 時めく松永安左右門翁の此の態度ハ他の紳士にハ見られぬ芸当である  
食事後虫干品を一巡された翁も之にハ失望された。そして予は平松君と蔵番西野君に依頼して  
特別出陳を乞ふた上 左の品々を拝見した。  
田中翁の指名で

- 一 大燈、国師古徳十七行大横物 表装中紫印金 上下北絹一文字竹屋町
- 一 同、五言文二日ク 奥作都無定中普殊眠■明花占外 雲室都竹間泉幾到無實際適婦有乘■氏不覺曉光連 「表装白地古金欄、一  
風茶金欄、上下太シケ

猶伝 昔泉州左海南宗寺什物澤庵和尚伝来、慶応年間酒井雅楽頭ヨリ木場鹿島清左右門へ、明治七年  
来ハ 石町松沢孫八に伝ル。同家より明治廿六年十月御殿山益田家ル渡ル」  
一 寧、山、二行文二日 「本来無一物何處過々■忍 一山老衲寧」  
■ 菩提本無樹明鏡亦非臺

一 古筆 午、翰、墨、城 大聖武、中聖武、皇明后、貫行高野切、桂萬葉、行成、兼行、俊成、定家、公任、  
菅公、鎌足、外十数経切、定頼、石山切、伊豫切、姫地切、この外名家数十葉  
此帖元古筆家に所蔵 猶古筆本の分ハ今古川家に伝ルと 已上拝見に一時余をツイヤシた。折柄仕合にも空  
せるも同家より益田家に移 同席ハ耳庵翁のお点前にて 田中、宮島、近藤 予 此際田中翁より臨時二師範無筆墨跡を  
此帖元古筆家に所蔵 猶古筆本の分ハ今古川家に伝ルと 已上拝見に一時余をツイヤシた。折柄仕合にも空  
せるも同家より益田家に移 同席ハ耳庵翁のお点前にて 田中、宮島、近藤 予 此際田中翁より臨時二師範無筆墨跡を

一 月、山筆稲の絵、東山 尚信写シ添へ 稲の葉淡墨ニテ三四枚に稲実を描き  
表装白地古金欄小牡丹 一文字茶地 紙中見事二白シ  
上下浅黄金欄 古金欄

一 師、範、無、準、墨 師範和南手日 箱に仙台伊達家より 表装 茶地印金 注明治十五年  
文二日ク 横物廿行 東福寺寄進トアル 上下上代北絹 価一万九千両

一 本、覚、上、人、元、庵、墨 云々、表装中廻し 上下茶北絹 「真珠庵■座首点字」 酒井家旧蔵  
跡 横物 浅黄地竹屋町 天源庵天室添状 「一万二千両

此元庵墨跡ハ東山御物七点の内と申事、但し東山御物総墨跡ノ七点の内有之こと哉 又  
ハ東山殿御物元庵墨蹟ノ七点之内有之や次第不分明に候へ共兎も角東山御物七点の内と  
申候へ墨跡格別の品物ニ有之事 右三并より納申候 元庵の墨跡横物之事なり

月山伝来追記 明治廿四年伊豫松山の豪商木村某ヨリ出テ、月山稲の幅緋月羅漢ト共に入ル  
土地ヲ某買入後大阪山中ノ手に移リ戸田露吟ヨリ益田家に渡ル  
已上各蹟多数 拝見之等ハ益田家名品中の名品にて研究と眼満此上なき仕合にて  
翰墨城の如き、表裏并て百余の古経古筆が古筆家より当家に移る際ハ万金にも

床に三溪翁筆 文二曰ク 政人落如秋、柳疎遂風白夜飛独 壬申(翻)感 三 此の合客ハ三溪翁在世中翁の  
有春山通待我白雲堪臥早須帰 画筆に對し批評を申込し事と

思ひ出したと共に 特に用いられしか、階上寄附二通ると 鈍翁筆の大字 「表装中廻し千体仏木判刷  
この幅を夜雨老 夢 一文字紺紙写経トこつた仕立」

〔壺〕八角 釜九輪 汲出磨手大破 箱裏二「枝にもる朝日の影のすくなきに 鈍翁トアル」  
風炉 銘朝日梅沢旧蔵 涼しさ深き竹の奥かな

此一碗に 香煎 扱階下席二「床へ高野山奥の院燃火料寄進受取書」花入 高麗 土風炉  
入れて 表装大師印刷紙を用ひ

水指 伊賀 不問老手造 さて会席ハ大井に 饅どん 野菜取合せ 大徳寺納豆 芋 焼物ハゼン 八寸 吾豆  
写 薬味入 薩摩汁

と云ふ雑味のこもりし 茶入 金輪寺 茶杓 大谷尊由師作、光悦写、大政斎作 已上 侘を中  
お手料理も嬉しく 大綱和尚 銘鶴 銘釋迦 赤茶 真に

茶友の作品など用ひられての情味深く、只拙作茶碗など出るべき物でないと 恐縮しながら  
老の厚意を謝し散会した

### ○柳瀬荘且坐庵の催し 十一月九日

p 366

日支事変は拡大に拡大し国内世論は軍部の圧迫に依り如何ともなすがままに物資の不足

壮丁の応召は日と共に増大し窮迫の度ハ一般民衆生活にも加るのみか、日米間の国交は一触

即発の危期に逼るこの頃とて不安と緊張に包まれる折にも茶の湯は時折行はれるが、行通も

又不弁となった際山荘迄遠出の客も次第に遠慮勝の今日耳庵翁より益田夫人もお越し故是

非お相伴と誘れ 魯堂遺族よりの贈り 在銘の魯堂の 携へ出掛く。僅か半月稲も刈入終り矢来に掛け  
物たる文亀二年 二字額を

田の面の景色も一変している

客組ハ(益田夫人に田中親美翁 平松老ト予 の四人)

待合に 吉田兼好の二首に汲出湯の道具 型の如くしてお主人迎附に庭伝い 且坐席に  
秋の歌

山内の紅葉も今が見頃なる庵の軒端の柿の熟せるも風勢深く入席すると床には 今日正客  
貞子夫人の筆

歌仙の画描に 鈍翁筆 讚あるお幅が懸り お正客の遜讓にも拘らぬ 風炉 古鉄菊透し 予の旧蔵  
蓬萊山の 名作に連坐敬服久し 大ヤツレ

釜蓋 炭具ハ前 香合 青貝 一文字 松浦家 にてお炭あり 香合ハ時代もより内宋にて  
回 同 旧蔵 図柄と共に結構なお品

只炭斗 組物の方 炭斗 取合しならん さてお懐石ハ向 鯛の細切 器ハ 黄瀬 見込に 菊花 汁 合せみそ  
金馬が塗物丈 黄菊アへ 煮物ハツ頭 朝鮮 八寸 ガシ子 香物 木瓜 刷毛目  
小鳥叩 焼物 興津鯛 進魚 老岐ノ雲丹 唐津 唐津 塩昆布 白菜

菓子ハ 手製 已上お手料理ながら数度の事とて熟練ハお出入庖丁も必用なき迄上達し客と  
キジ餅

しても其のお心入れと型にはまらず美味に頂く娛さ殊に今日ハ小田原からの珍客とて大分  
お奮発でもあつた。

中立後入席すると床に 宗白在判 古瓢が眺と云い なきに 花輪塔に が見事に挿れてある  
銘圖と ある 單下共に中分 杜鳥

水気滴るお花を眺る内金沢 彦 愛蔵 刷毛 水指 茶入 道安好 茶杓 松浦鎮信公簡二  
三島 大町清九郎殿へ徳祐

茶碗 黒織部 銘鶴太郎 と云ふ大振りながら、水指を前にお主人との対照もよく、例により強力に濃

茶が練られ一同巡服 賞味した 今日のお 取合こそ一分にすぎなきお手きわハ百練迄とは言はねど流石お

性格の現れ申分なきお振舞であつた。扱広間に通ると 牧陰写、遠寺晚鐘の幅 備前 花入に三種  
探幽筆

書院にハ光琳金地鶴の硯箱と云ふ豪壮な飾附 名品なるも 花人が床とハ一寸不釣合であつたが、  
備前ヘン壺

気持丈ハ良かった。番茶水果子など頂きながら、先公の偲出話や世の様な物語の内、小田

原ではここ数日虫干中との事にて日を期し風入れ拜見を乞いお暇して次の間を見ると、之れ

原ではここ数日虫干中との事にて日を期し風入れ拜見を乞いお暇して次の間を見ると、之れ

原ではここ数日虫干中との事にて日を期し風入れ拜見を乞いお暇して次の間を見ると、之れ



○柳瀬莊小集の茶 十月十六日

P 363

久しく埼玉にも遠のき魯堂死亡の前後より、自分の病中の見舞を得てもおり、其のお礼にも一回お訪したいと考へつつ、外出にも気重く、ためらいしに耳庵翁より稔の刈入も秋色を添へる頃ゆへ一度お出掛けあるべしとの事故、夫人の見舞旁々目白からの車を得て柳瀬へ出向く黄金色の稔の秋にも道すがら防空演習にモンペイ姿を見受る物騒しい世の中にも流石郊外風物は洗心の気満ちている。いつ通ツても良い柳瀬堤の川べり 山莊に八名古屋の 耕圃 山王老あり

老亦あり。大茅葺きの田舎家縁先より眺むる、清瀬部落の杜、高く聳ゆる海軍無線台を遠く見るのも時局の只ならぬを感じながら、趣向ありげな主人の引入に、敷台より入席すると、

玄関次ぎお寄附にハ 芭蕉 終秋なかくてあかつきの 詩絵住吉硯箱 赤絵火入の蓑盆 十哲 樽良筆 句 しかの聲 敷物菊湯の備へ

広間床にハ 唐 無学禅師云々の 書院 新羅時代 香炉 時代松木盆 松浦家 僧 大横物 共フタ鍍金 旧蔵 已上にて御主人

のお給仕 飯、松茸、焼物鱒切身煮物、牛蒡、八寸、ササゲ、香の物、胡瓜、黄瀬戸の小鉢と云ふ田舎

家風のお手料理も、物資不足の行迫りからでもあらん。中立は秋色豊かな園内逍遙と云ふ自由さ、 銅羅の 音幽に 間へ 渉る 林間を 予が 先頭で 日坐庵に 入室 床に 普齋 ありいたす あらまじりの 寒かな

の 小瓢に 野菊に ませと 云ふ 至極 任しき 風情に 挿るる 鉄風炉 建仁寺文字入 釜蓋 炭、金、馬 外 香、織部 灰器ノコンウ作 分銅 杓朝鮮砂張

水指釣、茶入 道安好、松葉、茶杓 慶首座作 元伯判 原曼筒 茶碗 長次郎作 尼寺 と云ふ名残気分申分なかしも 木地 釣丈

はお控へあし方よからんに 風なるも流石季節にはそれ下ドコカあまり型破は見受なかつた 三原翁に八年中名残 お茶が終り病室の奥さ んとも久々お会し、此程からの お礼を述べ病後の体として早目にお暇耕圃老と共に帰京した。

○前田南齋老の夜会 十月廿八日

P 364

下町繁華街に住む前田老から、久しくお会せぬから、下町情緒を味い旁々お出慮如何一服さし上たい との御好意にあまえて 夕方から散策をかね 前田老も近來 娘さん方に茶の稽古をされる 仲通り八室町の ことから自然釜に親む略 みも出たよふにて 店舖を椅子間にハ

石川宗寂老宗匠や 遠藤老らの同好者 があり備附にて 迹より岐阜水琴亭の縁者と 云ふ老婦人も参加され お湯を頂き階上に登ると

床ハ 某宗匠の 一行 娘さんの お給仕で 他ハ自作品を飾られ 信楽失書、 茶入了々齋 下町気分 of 馳走の数々を頂き 水指 予が此春贈りし お濃を頂く 今宵八道具とて之れと見るべき品ハなかりしも御 一家が心からのお持成しは心嬉しく厚くお礼の上散会ス

茶杓 不白作 燻竹 茶碗ハ 予が此春贈りし お濃を頂く 今宵八道具とて之れと見るべき品ハなかりしも御 一家が心からのお持成しは心嬉しく厚くお礼の上散会ス

○琴平町夜雨莊の一夕 十一月四日

P 365

茶友としてハなかなか面白く物にテラワス喫茶境に終始する夜雨主人より数日前からの お招を今宵に願ひ六時半参入すると台客ハ只一人それも未知の人、主人の紹介でハ、丸ビルに古く店舗を持たれる文房具老主人にて画に文に興味深き方と 服装ハと見れば モンペーに袖なし を羽織り素足と云ふ出で立 奇人とこそは 見られけり

# 『雲中庵茶会記』 翻刻稿 ⑦

後藤 恒

今回は、仰木政斎著『雲中庵茶会記』全二十冊のうち、第六冊の昭和十六年（一九四一）十月十六日条から、第七冊途中の昭和十七年（一九四二）十二月二十九日条までの記述の翻刻稿を掲載する。

太平洋戦争が開戦し、仰木は時折その戦況に触れながら、戦局が刻々と変化する中で数寄者たちが茶の湯を通じて交わった様子を臨場感あふれる書きぶりで綴っている。ことに松永耳庵は今回掲載する項目の大半に登場しており、仰木との親交の深さとともに、戦中にあっても精力的に茶事を開き、他家の茶事に参加していたことが窺える。昭和十七年の口切の茶事は真珠湾攻撃から一周年の日に定め、「有楽井戸」、蒲生氏郷作茶杓といった松永自慢の蒐集品を惜しみなく用いる（本書影印本上巻・四二〇～四二二頁）など、随所に戦勝祈願の趣向が見て取れる。他家の茶事においても、席主や招客に軍人の名が増えるとともに、床掛に戦意高揚あるいは武運長久をイメージさせる書画が用いられるなど時局に相応しい茶の趣向が散見される。

（ことわりひさし 福岡市美術館主任学芸主事）

## 凡例

- ・ 翻刻にあたっては、仰木政斎著・味岡敏雄編の影印本『雲中庵茶会記』（限定版・非売品、平成九年発行）を底本とした。
- ・ 影印本と照合する際の便宜を考え、項目ごとに影印本の当該ページ番号を表示した。
- ・ 漢字は原則として常用漢字に改めたが、常用漢字に含まれない漢字及び一部の人名表記では原文のままとした。
- ・ 変体仮名は現用字体に改めた。
- ・ 踊り字は原則として同音の平仮名表記に改めたが、「々」は原文のままとした。
- ・ 固有名詞の明らかな誤字は訂正した。
- ・ 固有名詞以外の明らかな誤字・脱字や文意が通じない部分は基本的にそのまま表記し、適宜傍らに「ママ」を付すか、註記した。
- ・ 原文において著者により文字の訂正がなされた部分は、新たに書かれた文字のみを示した。
- ・ 原文において補記として傍らに加えられた文字は、丸括弧に入れて行内の該当箇所に入れた。
- ・ 区切り符号の位置は原文のままであるが、文意に沿って翻刻者が句点と読点を区別した。
- ・ 判読不能の文字は■で示し、判読困難な文字について推定したものは□で囲んだ。
- ・ 前号までに註記した事項については、註記を省略した。

## 凡例

- 各論文中の作家名、作品名等については、福岡市美術館の所蔵作品である場合、同館の所蔵作品データの表記にならった。
- 各論文中の著作物については『 』、団体名については〈 〉、作品名については《 》でくくった。
- 註の参考文献については概ね下記の順で表記した。  
日本語論文 執筆者名「論文名」編著者名『著作物名』（出版社、出版年）引用ページ  
欧米論文 執筆者名“論文名”，編著者名，著作物，出版社，出版場所，出版年，引用ページ
- 註の中で、既に挙げた参考文献を前掲書として参照する場合は、前掲書（註番号）引用ページと表記した。

## 福岡市美術館研究紀要 第 11 号

2023 年 2 月 15 日発行

編集・発行 福岡市美術館  
〒810-0051  
福岡市中央区大濠公園 1-6  
PHONE：092-714-6051  
印刷 株式会社四ヶ所  
〒838-8512  
朝倉市馬田 336

### ■ 表紙写真 ■

龍折枝花文様克絲壁掛、中国・明時代、16-17 世紀  
福岡市美術館蔵

Tapestry Hanging with Dragons and Flowering Branches Design,  
Ming dynasty, China, 16th-17th century  
Fukuoka Art Museum  
14-Hd-224